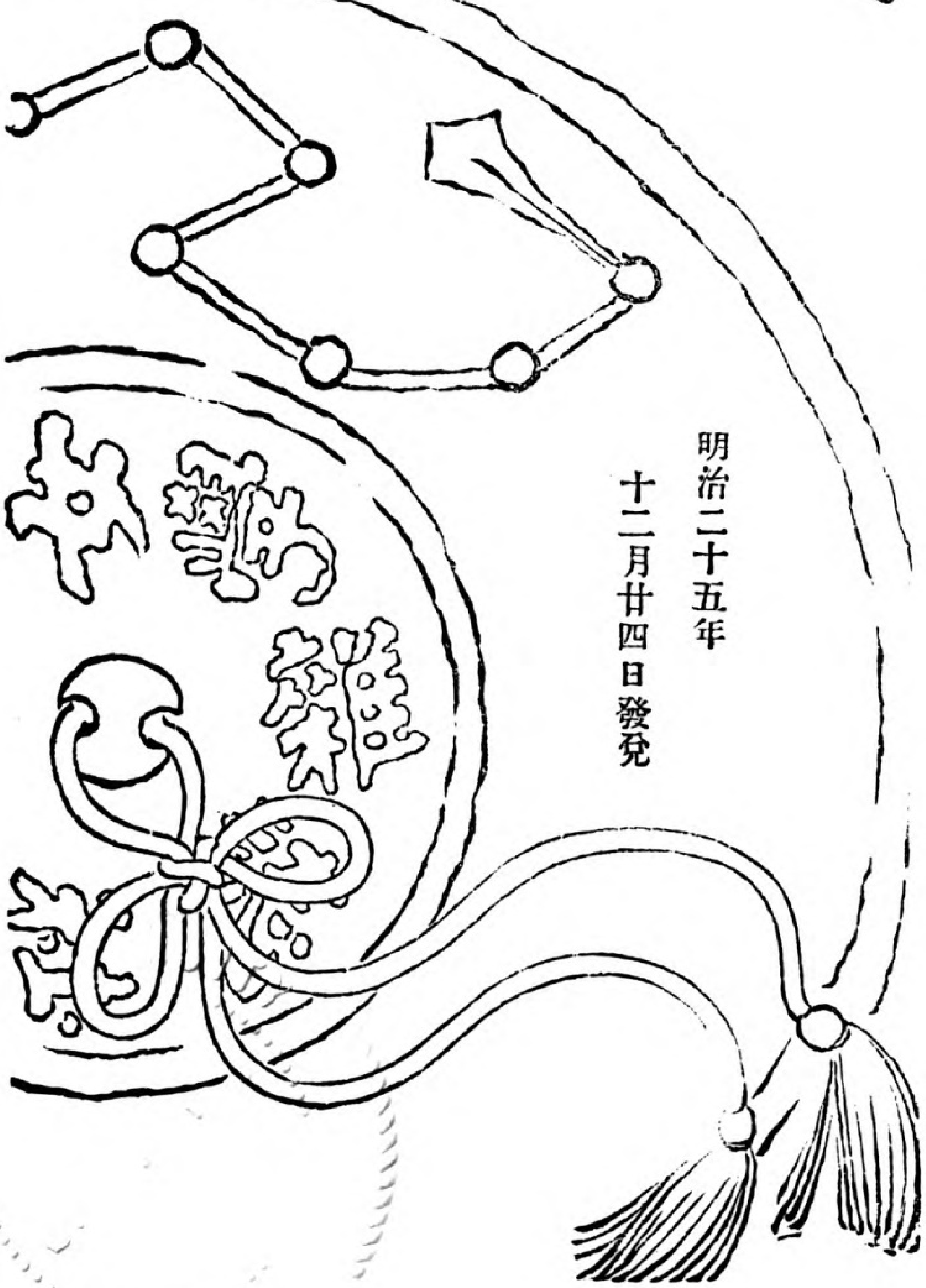
Dec. 1892
no. 334-2

女學雜誌

第三百三拾四號
乙の巻



明治二十五年
十二月廿四日發兌

注意

●社説　日本高等女子教育の爲め米國婦人奬學々資金
●兒籃　吾宿の花（第七回、下ノ三）若松しづ子
●文藝　候文章〇バイロンとゲーテ（下）
●家政　日記をつける事（ふみ子）〇家内重寶錄〇育兒
●雜錄　理想上の結婚（會津、稚松眞棹）〇今昔ものがたり（武家氣質〇僞善と慈悲〇賢君の自省〇女の前帶）秋玉庵集〇クリスマス祝ひの歌（紫苑山人譯）
●小説　朝顏（手習屋主人）
●史傳　フランセス、ウヰラード女史の傳（其二）
●摘要　孤女學院〇棄兒統計
●時事　年終る〇岡山孤兒院
●女報
●孤兒之友

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號（第三百三拾四號）目次

●社説　日本高等女子教育の爲め米國婦人奬學〻資金
●兒監　吾宿の花（第七回、下の三）若松しづ子
●文藝　候文章○バイロンとゲーテ（下）
●家政　日記をつける事（ふみ子）○家内重寶録○育兒
●雜録　理想上の結婚（會津、稚松眞棹）○今昔ものがたり（武家氣質。僞善と慈悲。賢君の自省。女の前帶）秋玉庵集○クリスマス祝ひの歌（紫苑山人譯）
●小説　朝顔（手習屋主人）
●史傳　フランセス、ウヰラード女史の傳（其二）
●摘要　孤女學院○棄兒統計
●時事　年終る○岡山孤兒院
●女報
●孤兒之友

豫告

新年初刊

一月七日發兌の赤表に掲載

貞婦於石　櫻井成明著

内助（西洋小説）　花圃女史譯

テニソンの詩　若松しづ子

前週（第三百卅四號）白表

○社説　荒野一望（教育界。經濟界。文學界。宗教界。政治界）
○批評　罪と罰（透谷子評）○大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評（雲峯子）○志賀重昂氏地理學講義
○史傳　韓非子を觀る（天知子）
○雜録　紅閨詩集を讀む（泣血生）
○摘要　基督教徒中の文學者美術家
○時事　王佐○面白くなし○高利の内國債○千島艦沈沒○將軍老ひたり○其二○其三○學生の發火演習○福澤先生の義俠○新次官の伎倆○誰か新次官を推せし○辻久保田二君の評○一文部省次官○地方官の流勢○銀林書記官○名文章○條約改正最終の覺悟○七日の衆議院○和衷協同○其案美ならざるに非ず○井上角五郎○二君の近狀○徒弟夜學校○洪河の源泉は枯葉の下にあり
○片々

前々週（第三百卅三號）赤表

○社説　宣教師派女學校に一策を獻ず（完結）
○雜録　婚姻の式のはなし（山下石翁）○今昔ものがたり（お万の方の機轉。節儉と吝。阿部忠秋の慈心。秀吉の心掛。板倉重矩の注意。女のたしなみ。利勝の教誨）
○家政　内治の辨○親戚の會合○家内重寶録○新工夫シャツ、ヅボン下たち方○茶話會（賢不肖の識別。外形と心裏。諺歌。障子紙。銀箔を急に錆さす法。冬日花瓶の水凍らぬ法。櫛に垢のたまらぬ法）○育兒（哺乳の定則）
○兒藍　吾宿の花（若松しづ子）
○摘要　聾啞結婚○若手女記者○婚姻の取締
○時事　高知の怪報○看護術○快よき知らせ○種痘規則改正
○史傳　フランセス、ウイラードの傳
○女報

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百卅四號 明治二十五年十二月廿四日發兌

社説

米國婦人奬學々資金

日本高等女子敎育の爲め

去年來折々世に聞えたる、日本高等女子敎育の爲め米國婦人奬學々資金なるもの、今や正に完成し、之が候補者を募集するの準備すでに整ひたり。

抑々も、此の奬學資金なるものは、津田梅子女史が米國敎育社界の婦人諸氏に訴たへて、日本高等女子敎育の爲めに鋭意募集したるものなり。其額、八千弗に達し、年々の利子四五百弗に及ぶべきを以て、之により一人の女學生を彼地の女子大學に入校留學せしむるを得べく、隨つて每四年に一人の高等女學士業を卒え桂の冠を戴だきて歸朝するの樂を見るを得べし。此れ偏へに彼地有志の婦人が我國の女子敎育を思懐するの厚志に據て成れりとは云へども、若し、眞率にして熱心なる津田女史の主唱盡力あらざりせば、決して成就すべからざりしの事業なりとす。

津田女史、七歲にして米國に留學し、十八歲歸朝して、華族女學校の敎諭たり、后ち在職の儘、再たび、彼地ブリンモア女子大學に入り、四年の星霜を經て、光榮ある女學士の稱號を得、取分け生物學に精はしきの譽を有す。平素、我國の女子敎育振はざるを慨し、身を以て大ひに任ずる所ろのものあり。此回の成功の如き、亦た其の奮勵の一つに成れるものとす。吾黨は、日本の女學の爲めに、深く之を謝し、且つ其彌よ淸健ならんことを祈る。

今や、此の學資金の爲めに、候補者を募らんとす。私かに、其試驗委員の説を聞くに、高等女學校、尋常女子師範學校、普通の宣敎師派女學校等の卒業生の學力を標準として、問題を提出すべしとなり。撰ばるゝものは僅かに一人なりと云へど、其試驗に應ずる人甚はだ少なき時は、彼地有志婦人の熱心と好意とに對して、何となく遺憾なるのみか、日本の女學生は、此しきの試驗問題に應ずるすら若く難澁なりやと思はせんと、重〳〵ねの恨事と謂つべし。試驗は、各地方に於て

執行すべきが故に、有志の女學生、意を決して成べく多數に試驗塲裏に出席せんとを促がす。之が爲に、候補者が旅行の入費、並に其雜用は、共に自便とす。之れ、篤志ありて金力なき女學生の爲めに、深く惜しむ所なりと云へども、委員諸君は、之をしも自由に供與するとを得べき法方を運らさんとて、太たく苦心盡力せらると聞く。此故に、最初試驗に應ずるものは、一と先づ此等の事を念頭外に置き、試みに其學力及び精神のみを答示せよ。天才にして黄金の爲めに縛らるるものありとせば、自から之を解助する人、他にあらずとは云ふ可らず。

吾黨は、此の年末に際して、かゝる愉快なる報告を爲すとを得たるを喜こぶ。日本女學生の爲に、陽光目前に開けたり、和氣來復、四而爽快の天地遠からずして來らん。諸君樂しみて之を待て。

日本婦人の爲め米國婦人の創立に係る
獎學趣意書

女子教育の必要なるとは今更めて言を要せず。而して、其目的たる一にして足らずさ雖も、一般教育上の點より之を見る時は、普通專門の二なるべし。女子普通教育は女子をして淑女たるの名に恥ぢざらしむるを以て目的さし、女子專門教育は、女子をして業務を修め活計の道を得せしむるを以て目的さす。抑も女子普通教育なるものは、其程度に於て定規あるに非ず、小學の教育より始まり、高等に進むに從ひ、漸次複雜さなり、文學、遊藝、遊技、禮式、家政等一さして缺くべからざるが如し。之を男子に比するに、男子の爲す可き業は外にあり、女子の爲す可き業は内にありて家を守るを主さす。然りさ雖も男子も亦自ら家政を知らずんば、家妻を助け善良なる家風を造る能はざるなり。女子も亦廣く社會の事變風潮に通ぜずんば、男子を助けて良妻さなる能はざるなり。而して一國の女子普通教育は、其國民の富實文明等の度によりて制せらるゝものなるが故に、一般に之を論ずれば、女子普通教育其適度を得ざる時は、良妻さなる能はず。宜しく國風に適ひ男子を助け兒童を教育し以て社會の進歩を助くるの大任を盡す可き也。又女子の性質より論ずる時は、其性質男子の如く彪雜ならず、其才能重もに日常生活に關係し、所謂常識に富み、愛情ありて人の憂を慰むる等は、其通有性さ云ふ可き歟。然りさ雖も或は天才人に優くれ、啻に一女子の職分を盡すのみならず、女子教育の先導者たるに適したる人ある時は、之に高等の教育を授け、充分其才能を發達せしめ、且つ廣く世界文明の有様に通曉せしめ、將來の爲め、本邦の女子教育者を養成するは今日教育者の忽にす可からざる所なり。

委員津田梅子茲に見るあり、先年米國在學中、日本女子のために獎學金を募らんとを、該國の女子教育者に謀りたるに、諸氏は女子高等教育に熱心にして而して方今日本の急務は實に其女子教育に在るとを知り、太たく贊成の意を表せられ、其盡力によりて、今や、已に該國有志者の寄附數千弗あり、茲に獎學金資本を得たり。此に由りて女子學生の爲めに一進路を開きたり。而して四年每に競爭試驗を以て一人を撰び、之を米國合衆國フヒラデルフヒヤ若しくは其近傍の學校に送り、四年間若しくは五年間學業を修め、且該國の事情に通曉せしめ、他日我日本帝國の女子教育者たらんとを期圖するものなり。故に別紙心得書を附し之を世に公にすさ云ふ。

明治廿五年十二月

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

委員長　津田梅子
　　　　巖本善治
　　　　岡見ケイ子
委員　加藤錦子
　　　添田壽一
　　　瓜生繁子
　　　島田三郎
　　　元良勇次郎

日本婦人の爲め米國婦人の創立に係る
獎學金候補者心得

第一條　此の獎學金は教師となり或は其他の方法により將來日本婦人高等教育のため盡力せんとする特志婦人のために設るなり故に此獎學金を以て脩業するものは其業成るの后必す其の目的を達し得るの才能ある者たるべく又其本人に於ても其志望を有せざる可らず。

第二條　獎學金は米國委員の所有に屬し其高は米金八千弗にして此の利子を以て獎學に發すものなれば其高年々四百乃至五百弗なりとす此を以て食料及受業料を拂ふとを得而して每四年に試驗を以て受金者を定め四年間脩業せしむるものとす其學校は米國委員に於て左の三學校を擇び置き尙生徒の志願に應じて委員協議の上其の一を撰ばしむ。
プレンマー大學。ペンシルベニヤ女子醫學校。ドレキセル學藝學校。

第三條　米國委員は生徒の學業を監督するのみならず生徒をして米國の社會及家政を見聞せしめ基督教的開化の眞面目を實驗せしむるを務む故に生徒は萬事該委員の指揮に從ふべし。

第四條　獎學金利子は食料受業料（プレンマー大學に於ては年三百七十五弗）及書籍料に足るの見込みなれば生徒は旅費及衣服料雜費（每年凡二百弗）を支給すべきなり夏期休業中は別に百弗の費用を要すると雖とも仕事をなして其費用を減するを得べし。

第五條　生徒渡米後直ちに入學する能はざるものと見做し當分四年の脩業年間の外豫備の爲めに別に一年を置き英語及他の研究をなして入學試驗の用意せしむ故に生徒在米受獎學金年間を五年とす。

第六條　候補者は凡十七年以上三十才以下の獨身者にして身躰健全なるものに限る。

第七條　候補者は十一條の規定により普通教育の試驗に及第するを要す。

第八條　獎學金願書は明治廿六年三月十日迄に當事務所に差出すべし。願書と共に差出すものは生徒の學力品行才能等に關する教師よりの保證狀履歷書醫師保證狀等なり。
願書を出すには東京に住居する身元正しきものゝ保證を要す。

願書
私義今般日本婦人のため米國婦人の創立に係る獎學金候補に相成候に付ては御規則に從ひ御試驗願度且つ及第の上は充分精神を盡し委員の期望に應す可く候

年　月　日

何縣何國
誰女或は妹
姓　名

獎學金委員御中

履歷書（普通の履歷書式に由るべし）

第九條　試驗は東京及地方に於て之を執行す。日限は三月二十日乃至四月一日間に日を定め各候補者の便宜に從ひ各地方に於て同問題を出し受驗せしむ

第十條　受驗者は受驗料として金一圓納むべし
但し願書と共に差出すべし

第十一條　試驗科目は左の如し
國語
漢學
日本歷史
數學（英語若しくは日本語にて答ふるを得）
英語（I wing's Sketch book; Johnson's Raselas; Tennyson's

Enocharden の類に相當する英文を標準とす)

理科
- 地文學
- 植物學
- 化學
- 物理學
- 生理學

此の中一を擇び英語若しくは日本語にて答ふるを得

○右諸科目中英語を除く外の問題は大凡高等女學校卒業の學力を標準として提出す

左の科目は受驗者の望みにより參考のため試驗することあるべし

佛語　獨逸語　羅典語　立体幾何　三角術　平面幾何

米國史(英語)　英國史(英語)

第十二條　候補者の學力は各科試驗の平均點より定むると雖も國語教育は今後習練せしむるの機會少きを以て殊に之に重きを置くものとす英語は渡後米入學し得るの學力を以て程度と定む且候補者は參考科中成る可く受驗するを得策なりとす。

第十三條　試驗は凢四日間になすべし試驗は受驗者の巳に學び得たる知識を試むるのみを目的とするに非す其德性才能をも試むるものなれは成る可く其心得にて答ふべし。

第十四條　英語の試驗は英文和譯和文英譯英文作文等なり

第十五條　試驗の結果は四月三十日迄に各受驗者に報告すべし。

第十六條　受奬學金者は二十六年夏渡米し仝九月學業を始むる見込なり。

第十七條　委員一同は受奬學金者に望む此の奬學金は既に得たる學力を稱するために非す又將來唯知識を廣むるの目的に止らす故に生徒は愛國心を專一とし自己の學ひ得たる事柄を歸朝後本邦婦人の爲めに利用し婦人の位置を高からしむるを以て目的となすを望む然れば其責任决して輕きに非ざれば米國在學中品行方正なるは勿論常に其責任を忘れずして業を遂け榮譽ある生涯を送られんことを望む

第十八條　其他何事にても質問あるときは郵劵二錢を添へ事務所へ問答すべし。

東京麹町區下六番町六番地明治女學校內
奬學金事務所

兒藍

吾宿の花

第七回　(下の三)　　若松しづ子

此時ホイッテヤ氏は

イヤ、とんだ失策をやり升た。併し目的は惡るくないのだからネ、無暗と物好に、あなた方の內に立入つたのでないといふ丈は、御承知なすつて下さい。實はどうにかしてあなた方のお役に立度については、たとひ、あなたに直かになに申たとて、かう〳〵と話して下さるものではなし、かふ申すと失禮の樣だが、中〳〵我慢のお强い方だからネ、(といつて、微笑しながら)さてかの貸借一件ネ、あのとについて少し御相談をして、取きめ度ので、今まで通りにして置いては好くないとはあなたも御同意でせう。デ、どふするといふのです、よく分りませんよ直にも返濟して貰ひ度とおいひのかへ

コレはまた何と仰しやるのです　僕よりも兄貴の氣象は何

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なたが知り貫いておいでなさる譯だから、今てもなく例の一札を反古にして仕まつたら、どんなものだらうといふのです。兄貴腹をたてやうか〟

どふもなんともいへません〟、立腹といふでも有ますまいが、今の處、少し心地をわるくするかも知れませんよ。マアー寸、こんな想像をするかも知れません…………

といひかけて、あとをどの樣にいわふと躊躇する風が見へました。

僕が兼ての御無禮を金づくでとり消さうとして居るかと思ふかも知れんといふんでせう。イヤ御遠慮には及ばない、づん〳〵いつて下さい、僕もそのことは思わないとはないのです。

須臾口を閉ぢて後ち、

姉さん、兎に角、外のことは謂はん、あなたは僕の眞の姉、おなじ母から生れたのでせう。して見れば、弟のわたしがあなたの重荷をいくらか輕くしようといふのを甘んじて受けて下さらぬ筈はないと思ひ升。といつて、何も此家族の樣子をすつかり變へる程のことをしよふといふのではない、たゞあなたや子供たちの爲にも少し生活を樂にして上度ので、それも別段誰の眼にも立つほどでない、些細なことにネ、今まで多年の間、あなた方の爲に何もして居らないといふことは實に赤面の譯なり又今さら非常に後悔することです。子供は幾人でしたかネ？十人、それはさうと、あなたがたしかにお悅ろこびなさることをお話しませう。おやぢの死ぬ少しまへでした、わたしの總領の息子が生れ升たつけが、しつかりした好子でしてネ、おやぢの名を貰つて、アーサとつけたんです。それが四才の歳まで生きて居升たつけ、おやぢは此兒が大の氣に入でネ、自分の側へ引着ける樣にして置升た。ある日のことでしたわたしに向つて姉さんの總領息子が生れたら自分の名を遣つて、その敎育費にする積りで少し許りの金を貯へて置た處が、姉さんに生る子供はどれも〳〵女の兒だから、それをわたしのアーサにやり度つて言われたんです。わたしも其時は貧亡で、イヤ貧亡の味はわたしもよく知つて升、それで、子供の未來の敎育費が出來たとは大層嬉しかつた。然る處神は其子供のために尙一層結構な思召が有つて、ろく〳〵心がまへもしない中、急に御

自身に引とつておしまいなすつたのでした。此時は大よわりによわり升たが、まだ本心に立歸らない、商業に身を委ねて居て、毎日戰爭の中に居たので、身を顧みる暇もないのでした。貧乏してからは性質が僻がんで、コセ〳〵した世の活計に追われて、心も冷たく、頑固になつて居升た。さて其金は銀行へ預たまんまそつくり手をつけずに有升。流石遺憾でそれには手をつけようと考ることさへ嫌でした。ですから今になつておやぢの元來の望を全ふさせる樣にそれをつかわふでは有ませんが。おやぢの名をおつけなすつた息子のものにして少しも無理はないでせうチィ姉さん。グランド夫人此話しを聞く中に感が迫つて涙をおさへることが出來ない程でした。萬づ尊きは神の攝理の中に有つて、母なる自分よりも先にアーサの利益を謀つて下さつたことを思ふて、部屋へ退り、跪づいて、感謝を致し升た。其心の悦びは母になつた人でなければ察することが出來ぬ位でせう。

○成功を得んと欲せば常に機會に應ずるの用意を爲せ（ヂスレリー）

○聽くに注意し判斷に公平なれ（ソクラテス）

文藝

○候文章

近頃、「候文範」と云ふ二卷の書物世に出でぬ。好き本なり。名文章はとかく手紙に多きものなるが、分けて候文に多し。「此候は本當の候に御坐なく候、次に認め候候が本當の候に御坐候」などは、古來もの笑ひとなれる候文なれど、亦た一種味ひある文章にて、無下に卑しむべきものならず。扨て、候文に何ゆへ斯く名文多きやと云ふに、その一大元因は、「候」と云ふ字を用ゆるが故なり。「候」文字を用ゆれば、何故、名文章となるやと云ふに、句切を善くし、自然簡潔にして、冗長ならぬように引しまるが故なり。之によりても、文章に簡潔と云ふことの大切なる所以を味ふべし。

バイロンとゲーテ（下）

今頭を廻らしてバイロンを見よ、彼れ素より自然を見たり、アルプスの氷河疾風の如き彼れの眼に映じ來りしも彼れは只其の偉大なる形象を見しのみなりき。彼れが妖魔や、アリマ

テヤ未だ眞正なる鬼神ならず、是れわれ等が考ふるものと異る處なし、眞正の鬼神は彼れの如く容易に創作し得るものに非ず、ゲーテの如く、哲學者科學者の如く深く默念して後始めて出で來るものたり、詩人にして自然に接し、岩石の永く地下に埋れたる、水流の永く絕へざるを見るもの將に彼の古へのグリーキ人が驚きし如く驚嘆して其の何が故に斯くなれるやを探らざるべからず、奇なるかな水の性や、或は動或は靜、そのわれ等と異ると幾何ぞや、斯くの如き問題を究めんにはわれ等自己を離れ自然の內に溶化して思考せざる可からず、是れ近代の人の難しとする處、殊に英國人の難しとする處、更にバイロンの難しとする處、シエレー、キーツの如きはや丶之に近づけるものなれども猶及ばざる遠し、是に於て思ふ、ゲーテの如く國民の天才と鍛錬とを要するを、英吉利の人を見よ、其の思想は意志と實行とを以て滿てり、左らば彼等は活動を好み障害に抵抗して進み、思辨を退けて實利なきの術に向ふ能はず、形而上學に於ける自由は功利致の先入に依りて滅却し去りぬ、斯くの如き國民にして誰れか能く自然に接し個々に其力を精察するの想像を有せん、而して其能はざるもの誰れかバイロンの如きものあらんや。ゲーテが見て廻流して地を肥すとせし水もバイロンには一塊の氷と化せり、彼れは只一個の形の外他を認むるを得ざりき。ゲーテの詩眼に映ぜし人と神と自然との千差万別は盡くバイロンに於て失せ去りぬ、彼れは自己の內に捕はれ自己の外他を見ると能はず終に單調の詩人となり果てぬ、是れ彼れが遠くゲーテに及ばざる處たり。

然れどもバイロンが斯くあるゆる力を一身に集めしは彼れの偉大なる所なり、見よ如何に「ファウスト」の小にして「マンフレッド」の大なるかを。若し「ファウスト」より人性なるものを引き去らば殘る處幾何ぞや、かれは徒に感覺の影を追ふて走り放蕩に浮かれて些の意志なきもの、一言之を蔽はば品格のなきものなり、而して之れ獨逸全躰の狀態なり。マンフレッド」を以て之れに比せば如何に、彼れは實に丈夫なり、他に彼れを顯はすに適せるの言なし、彼れ妖魔を見て恐れず、金なく名譽なく力なきを悲しまず、妄想に樂しまず、學士の如くならず俠骨ある武士の如く、善く他を壓服し又己を服せしむるを知る、魔術を學ぶも錬金者の好奇心より爲せ

しに非ず疾風の如き精神より發し來りしなり(manfred,III,1.參照)。戀愛の流は道を閉ぢられて一身に溢れ來り彼れの心を荒し去れり、其の愛せし妹の死は悲哀を以て彼れの精神を充滿せしめ遂に人生を以て滿足する能はざらしめぬ、左らば其の一念は凝て遂に彼の女を靈界より呼び來れり、彼れ全身を震動し悲鳴して靈の前に出で言を發せんとを懇請す、靈の去らんとするや彼れか腕は痙攣す而れども直ちに回復す妖魔見て言ふ

"He mastere the himself, and makes
His torture tributary to his will,
Had he been one of us, he would have made
An awful spirit"

と、見よ其の意志は確乎として立てり、魔王も之を挫く能はず、小魔が囂々として彼れを裂き棄てんとするも彼れは靜穩に嚴肅に立てり、遂に彼れ死に至るまで襲ひ來る妖魔と戰ひて勝てり。

斯くの如きの我、屈すべからざる我、鬼も人も撓まず能はざる、善も惡も自ら行ふ墮落したる神の如き我、此の我こそはバイロンの精神と其曲中の人物とにして又英人の思想たり。若しゲーテを以て宇宙の詩人とせば、バイロンは個人の詩人なり、若し前者を以て獨逸の思想を紹介せしものとせば、後者を以て英吉利の思想を紹介せしものと云ふべけん。

家政

○日記をつける事

ふみ子

家事紛擾となるに從ひ、日々の出來事を一々記臆し置く事は如何なる記臆能き人と雖も出來憎き事なり。而して日々の家內の出來事は、至て些細なる事のやうなれ共。何日に何人の來りしや、何日何れより手紙來りしや。此週の菜は主に何を用ひしや、小使金は何程を消費せしやなど、其時には左まで必要なきとのやう覺ゆるものにても、後日に至りて大に其の記臆をば呼起さねばならぬ事のあるものなり。殊に金錢の支出を明細に記し置く時は、月末に至りて其支出意外に多かりしとあるも。更に其帳簿を點撿して、何々の費用は之れを省くを得べかりしとか。又は本月は斯く〳〵の臨時費ありし爲め、是非此超過を生ずるは、免れ難き事なりしとか、其の理由を見出すにも便利にて、大に參考を資くるなり。故に一家

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を掌り玉ふ方、若くは一人にて生活を營み玉ふ方にても、是非此日記をつける事は廢し玉ふべからず。殊に此頃賣出せし吾家の歴史といへる日記簿などは、更に其範圍を擴めて、日々に爲したる事、得たる思想、社會の出來事の欄をも設け是等の事をも併せて記し得らるゝやうになしたるものなれば、座右に置きて日記をつけるに殊に便益あるやう覺ゆ。強ち之れを求め玉はずとも、手製にもせよ帳簿を備へて、日々の出來事を記錄し玉ふは願はしき事にこそ。

家內重寶錄

黒豆を紅にする法

黒豆を水にて洗ひ、乾きたる時梅干の下へ敷おけば、色紅になるなり。之れを常の如く煮て用ゆれば、一寸風變りでよし

唐辛子生にて貯へやう

唐辛子を鹽漬にして貯へ置く時は、何迄も生にて保ち、風味も變らず、香も宜し。

餅にかびの生へぬ搗きやう

餅を搗く時、餅米壹斗の中へ、氷砂糖四匁をとり水の中へ入れて用ゆれば、かび生ゆとなし。

蜆を煮る法

數升の蜆に、糯米四五粒を入れて煮れば、肉悉く貝を離るゝなり。

甘酒早造り

熱き粥へ麴を入れ、冷るまで掻き廻し、一夜經る時は能きかたまりとなるなり。但米は麴の四分の一の割合とす。

あらめを煮る法

酢を少し入れて煮れば早く熟するなり。

昆布を久しく貯ふる法

昆布を久しく貯るには、新しきたわしにて昆布の砂を掃き取り、茶筌などにて酢を少しづゝ打ち掛けて卷きて納め置くなり、久しく味變はる事なし。

中華玉子

鯛の身（他の魚にても宜し）を能く擂り、雞卵を入れてよく溶き、小杓子にてすくひ、うす鍋にて程能く燒きて、編笠形に二つに合せるなり。

竹の子慈姑

極上なる大慈姑を鹽水に漬け置きて、菓物の皮をむくやうに薄くむき眞の處までむきて竹の子の穂先の如く卷き延ばし。終りの處を竹のひごにて卷止め、鹽出しをして蒸籠にてむし其儘適宜に味を付けて二ッに庖丁を入れて用ゆべし。

ゑぐ芋を煮る法

ゑぐ芋を煮るには、山椒粒二三十位入れて煮れば、ゑぐみ去るなり。里芋の莖を煮るも山椒粒を入れれば好し。

はじかみ黴ざる鹽漬法

はじかみを能きほどに刻み、洗ひて能く水氣を去り、然る后梅酢に漬くべし。漬る時辛子を少し絹の切れに包みて、底に入れ置く時は、一年を經てもかびる事なし。

海苔湔燒

淺草海苔に醬油少し打ち、炙り置きて豆腐に白味噌少々加へ山椒を少し入れて細かに摺り。之れを海苔に塗り付けて、胡麻の油にてあげ適宜の大きさに切るべし。
串に挿すも宜し

煮山椒

朝倉山椒の能きを撰み、鍋にてゆで、わらき枝を去りて笊にて水を切り。味淋にて能く煮燒鹽にて鹽梅を付るなり。

煮蕃椒

とうがらしの後先を切りて種子を拔き、ほうろくにていり、鍋にてゆで、一日一夜水に漬け能く水を切りて後、味淋と燒鹽にて加減をするなり。

育兒

乳歯の生へて后の處置

乳齒生へて後は、一日に一度或は二度位、試として人工食を與ふべし。其食物は咀嚼の勞を要せざる半流動食を能しとす即ち山慈姑、又は大麥小麥等の粉類を軟熟とするか、然らざれば牛肉犢肉雞肉又は羊肉等を以て製したる羹汁に、適宜の粉類を交ぜ、之れに食鹽砂糖を加へて鹽梅し、泥狀になしたるものを少重づゝ用ゆべし。

斯くして一二ヶ月を經たる后、何の障りもなければ、一晝夜に三回又は四回宛も人工食を用ゆるやうになし、漸次に斷乳の準備をなすべし。

八九月を經たる子供には、半熟の雞卵を與ふるもよし。又蒸

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

餅を細かに碎き、之れを熱湯に浸して、少許の牛乳と砂糖食鹽を加へたるものなども、適當の食物なり。

断乳の時期幷に方法

斷乳の時朝に就ては諸醫家の說に於て、大同小異ありと雖も、先づ滿一年位を適當とす、若し子供虛弱にして人工食に堪へざるやうなれば、二ヶ月乃至三ヶ月ほど延ばすも宜し。斷乳后も力めて消化善き軟食物を與ふべし。之れに併せて牛乳スープなどの、滋養食をも與ふることを忘るべからず。而して斷乳の方法は、漸次に乳を與ふることを減じて、人工食を增すを能しとす。若し急遽にする時は、大害を惹起すものなり。此節別て注意すべきことは、子供を戶外に出して新鮮無塵の空氣を呼吸せしむることなり。斯くすれば大に消化機の作用をば奬むるなり。但雨天の日、又は風强き日、日沒后などは却て害あれば、能く其日と時とを見計ふべきなり。

二歲より滿八歲迄の子供の食物

滿二歲を過ぐれば、追々齒も生へ揃ひ、咀嚼の作用充分となるものなれば、此頃よりして隔日位に、肉類を與へて宜し。魚肉も獸肉に次ぎて滋養あるものなれば、日本の如き獸肉の少き國にては、主に之れを用ゆるも可なり。但鳥獸肉魚肉共に、成るべく纖維少なく、消化の善きものを撰ぶべし。其間には、粥、或は至て軟かき飯、パン、馬鈴薯などを適當に交ぜ與ふべし。

要するに小供に要する食餌は、啻に身體の營養に必要なるのみならず。其筋肉骨質等を成育せしむる、上に於ても亦必要あるものなれば、母親は其點に深く留意して、成るべく養分多きものを撰むべし。然れ共亦小兒腸胃の强弱體質の如何に依りては、單に此理法にのみ依るべからざるものもあるべければ、能く其消化の狀況に注意して、腸胃の力と相適ふものを與ふるやう數多の食餌の中に就て取捨することも亦母たる人の肝要の心掛なり。

子供の知惠段々發達し、畧理非を辨ずるやうになりたらば、食戒の大切なる個條を敎へ置くこと必要なり。先づ飲食物は必す緩やかになすべき事、能く咀嚼して急に嚥下すべからざる事。時と量とを定めて間食すべからざる事、等を嚴しく諭し置き其規則を守らしむるの良慣習を付け置く時は、後來の爲は大なる利益となるなり。

雜録

理想上の結婚

會津 稚松 眞棹

遙かに某々の結婚をことほぎて

婚約成るの後數年、茲に佳辰を卜して伉儷の典を擧ぐと聞く、遙かに想像の翼に乘じて此間に逍遙遊せん、金屏立連ねたる所、銀燭燿く邊、新郎あり、新婦あり、更に多くの知己朋友親戚ありて列座せり、誓約と握手とは既に終り、祝辭と歡聲今や酣なり、此時、新郎は心に歌ふらん、

女子等の中にわが佳耦のあるは荆棘の中に百合花のあるがごとし、あゝ美しきかなわが佳耦よあゝうるはしきかななんぢの目は鴿の如し、わが妹わが新婦よなんぢの愛は樂しきかな、新婦よなんぢの唇は蜜を滴らし汝の衣裳の香氣はレバノンの香氣の如し、賢く事をなす女子は多けれども汝はすべての女子に愈れり（雅歌二〇二、一〇十五、四〇十、十一、箴言三十一〇廿九）

新郎の友は告ぐべし、

我聞く己の身を惡むものは曾て有ことなしと、夫はその婦を己の身となして愛すべし婦を愛するものは己を愛するなり、キリストの教會を愛して其ために己を捨て給ひし如くなんぢも婦を愛すべし、苦を以て之を待ふ勿れ、之を遇ふこと弱き器の如くし理に循て之と同に居これを敬ふこと生命の恩の嗣者の如くすべし、

新郎は必ず答ふるならん、

感銘せりと、

新婦は心に喜ぶならん、

わが愛するものゝ男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし我ふかく喜こびてその蔭にすわれり、その我上にひるがへしたる旗は愛なりき、わが愛するものよあゝなんぢは美しくまた樂しきかな、我愛するものわれに語りていふわが佳耦よわが美しき者よ起ていできたれと、我はわが愛するものにつきわが愛するものはわれにつく（雅歌二〇三、四、一〇十六、二〇十、六〇三）

新婦の友は勸むべし

我聞く智慧ある婦はその家をたて愚なる婦はおのれの手を

以て之を毀つと、婦なるものよ主に服ふが如く己の夫に服ふべし、また婦は耻を知りよく愼みて宜に合ふ衣にて自ら飾り髮を編こと丶金と眞珠と價貴き衣を以て妝飾とせず善行を以て妝飾とせんことを願ふ神を敬ふ女はかくすべきなり婦は凡てのこと順ひて靜に道を學ぶべし、

新婦は當に應ふるならん、

服膺せんと

更に新郎新婦の友は歌ふていはん、

誰か賢き女を見出すを得んその價は眞珠よりも貴としその夫の心はかれを恃みその產業は乏しくならじ、彼は喜びて手から操き、夜のあけぬ先に起てその家人に糧をあたへ、手を貧者にのべ手を困苦者に舒ぶ、彼は口を啓きて智慧をのぶ仁愛の教誨その舌にあり、艶麗はいつはりなり美色は呼吸のごとし惟エホバを畏るゝ女は譽られん、新郎の喜悅掬すべきなり、

あゝ愛よもろ／＼の快樂の中にありてなんぢは如何に美しく如何に悅しきものなるかな愛は大水も消すとあたはず洪水も溺らすことあたはず人その家の一切の物をこと／＼く與へて愛に換んとするとも尙いやしめらるべし、此愛をうくる新婦の快樂限なかるべし、

願くは新郎新婦の愛の契千代八千代まで榮えなんことを、

古歌に

ふして思ひおきて數ふるよろづ世は
神ぞしるらんわが君のため

今昔ものがたり

秋國庵輯

○武家氣質

大阪の鴻池善右衞門といへるは、昔より世に聞へたる富豪にて舊幕府の頃には、多くの大小名の用金を一手に引受けたるほどのものにてありしかば、町人ながらも諸侯のもの受け大方ならず、天明の頃何代目の善右衞門やらむ伊勢參宮したる序江戸へ出府し、牧野家は兼て親しき間柄と見へ其濱町の中屋敷の長屋を借り受け逗留し居たり。此事を聞及びて平素鴻池へ金銀用向家來分にてなど仰せ付らるゝ諸家よりの饗應大方ならず、或は屋敷へ招かるゝもあり、又は菓子料理など給はるもありて其品門外に溢るゝ計りなりければ。或日善右衞

門家中の子供等大屋勢敷内に遊び居るを見て、手代に命じていへるやう、所々より頂戴の菓子餘りに夥くて今は取捨る外なきほどなればそれをあの子供衆に振廻ては如何ならむと。手代も尤に思ひて其子供等を呼び入れ、志かく〳〵の由いひて菓子を與へむとせしに、何れも之れを頷はず我々は侍の子なり。捨てむといふ菓子をば何しに喰ふべきぞ、善右衛門如何に金持なり共彼は町人なり。侍の子に對して不埒の申條かなとて銘々に菓子を投げ返し、或は其邊へ捨て之れを踏にじるなど以ての外騷ぎ立しかば、手代共色を失ひて種々に詫言し漸くに之れを宥しといふ。子供ながらも平素父兄の武家氣質を見習へりしにやいと頼母し。今の世は舊士族の子弟にも、此氣全く失せたりと見へ。可惜壯丁と見ゆるものも、金錢だに得なば、頭を叩かるゝも能しといふほどになりたるは、悲しむべき事なりかし。

○僞善と慈悲

人の窮を見て之れを憫むは、誠に美しきことにてはあれど、能く其窮者の事情を詳にして后に之れを救はざれば、却て他の依賴心を增長せしめ、怠惰心を幇助することあるものなり。窮者の中には天災地變、又は其他の不意なる出來事に依りて他の救助を仰ぐに至りしものもあるべけれども、中には怠惰放蕩の爲め、好んで身を薄命に陷れたるものもあるなり。斯の如き者に慈悲を施すとは却て宜しからず。故に能く其原因を究めて然る后救濟の策を施すべきなり。徒に皮相の可憐なる狀況を見て俄に心を動かすべからず。近頃世に喧傳したる妻殺しの犯人河野儀平とやらむいへるものも、其名は母の眼病を救はむが爲の迷信に出たるなりといへど、其實然らざるの事情あるやに聞ゆ、されば慈悲を行ふの際には他の勞苦して纔に饑を免れ居るものをして、惑を抱かしめざるやう注意するこそ肝要なれ。今其一例とすべき話あり、何れの頃にや或る大國の大名數多の坊主（茶の給仕などするものなり）を抱へ置たるが、其中の一人年老ひたる母を養ひかぬるとて。己れが主より得る扶持をば母に與へ、己れは家中の諸士の家へ出入して貰ひ喰をなして暮しけるが、此事を主人聞及びて甚不憫に思ひ、三人扶持をば增し遣しけり。家中何れも主人の慈悲を喧傳する中に一人老功の士ありていへりしは、夫は能く〳〵御穿鑿ありて後の御處置か、若し別に御穿鑿といふ事もなく、只其貰ひ喰

をするを、憐れに思召ての事ならむには、是小事に似て實は大なる御誤にてあらむ。先づ試に思ひ玉へ、殿の召遣ひ玉ふ坊主は大勢ありて何れも似寄りたる御扶持を戴き居るなり。然るに他の者は妻子をも養ひ、又其他の厄介をも過し行くものもあらむに、彼者は一人の母をば過しかぬるとて、貰ひ歩行を爲すは不屆なる事なり。之れを惠み玉はむは慈悲は慈悲にてありとも、夫にては他の坊主共君を怨むとあらむも計られずと申せしかば。猶能く調べられしに、果して彼者は大酒家にて夫れが爲に母をも養ひ兼る次第と分り、主人も其過誤を悔たりといへり。されば善悪何事に限らず、只其皮相の觀のみにては、何とも判斷し難き事なるは、兼て記臆し置べき事にこそ。

〇賢君の自省

紀州公頼宣曾て砂丸馬場にて御馬を召されけるに折ふし時雨降出ければ、南の櫓へ入り雨の晴間を待たれける。徒然なるまゝに下の往來を眺め居玉へしに、青柳傳三郎といへる小性色純子の袴絞り股立にて、羅紗の雨合羽數寄屋の足袋塗臺の高木履に、下人に長柄の傘さし掛けさせ、悠々として通りけるが。其跡より來りしは藪三左衛門といへる侍にて、是は跣足にて股立高く取り、木綿羽織に手傘さし、徒歩の者十二三人打連れ、眞黒になりて走り行けり。頼宣之れを御覧じて近習のものにいはれしは、今通りし三左衛門は、素と細川忠興の臣にて、幼少より忠興に遣はれ萬事忠興を見習ひし故あの甲斐〴〵しさを見よ。彼は今二千石取り居る身にて、跣足に木綿羽織手傘さして屈強なる徒の者ばかり大勢召連たる利發さよ、あれこそ眞の武士とはいふべきなり。夫れに引替へ彼小切米の青柳が絞り股立數寄屋足袋、高木履に長柄の傘さしかけさせたる鈍なる姿は何事ぞ。人は召遣るゝ臣下の仕方にて、主人の賢愚も推計らるゝものなれば、青柳の仕方は我恥なりと仰られ、少時惕然たる狀況にてありけるとぞ。古語にも、其君を知らざるものは其臣を見、其父を知らざるものは其子を見よといへるとあり。弟子として師を顯はすも、民として國を代表するも、皆其意義一なるべければ、一人一個の言行も、繋る所大なるとは何人も常に覺悟せざるべからざる事なり。

〇女の前帶

今は女帯を前にて結ぶといふ事はなけれ共、昔しの婦人は往々前にて帯を結びたるものなり。尤若き婦人は昔にても前帯をするといふ事はなかりしが、夫に後れたる婦人などは、多く帯を前にて結びしやうなり。昔の慣習の殘れるにや、今にても奈良堺邊にては、下婢を雇ふに、年若きは後帯と唱ふるなり。是は年増のものは、前帯を用ひしに對しての語と思ふ。さて此前帯は何れの頃より行はれたる事ならむといふに、明暦万治の頃より始まりたる事なりといふ。此頃京都祇園清水邊の茶屋女、參詣の多くある時帯の解けたるを、前にて結び背後へ廻す遑なきを以て、前にて結びたるまゝ茶なんどの給仕をなせるより、流行り出せる事なりといふ。而して此風俗は賤しき業を營みし婦人、又は京都の町の女、又田舎の婦人にも及ぼせしかども、武家御所方などには、斷じて行はれざりしといふ。今も京都の島原にある賤業者は、依然前帯になし居るなり

クリスマス祝ひの歌

紫苑山人譯

○よろこびのかねを　うてよ〳〵

エスのあれましに　きよきあした
きけよ谷〳〵に　ひゞくみうた
つちにはおだやか　ひとにめぐみ
よろこびの　かねを
おとたかく　うてよ

○よろこびのかねを　うてよ〳〵
みつかひのうたは　なほもきこゆ
ひつじのむれにて　ありしはなし
くるとしとゝもに　さらにきこゆ

○よろこびのかねを　うてよ〳〵
すべてのたみらの　くびきをとり
すべてのこゝろを　めぐみゝたし
かつたゝしたまふ　このあしたに

○よろこびのかねを　うてよ〳〵
すべてのなやみは　みなきえゆき
きみがくだし玉ふ　そのやすきは
あめつちとゝもに　かぎりあらじ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

朝顔

手習屋主人

見送くり（七回）

二日を經て房子より手紙おこせたり。彼が自ら書きしものにてかの尼が庵の裏へ來らんことをとあり。

至れば彼れ先づありけり。彼は涙に濕ひ語らんとする事も能く明かに言ふ能はざりしかど彼れ父に如何に請ひたりけん今一たび我に考へなほして見んことを告げよと云はんとすと見へたり。よりて我は軍人の身の上より公の制規など精しく語り聞かせぬ。

思ふに我は幼き日彼と共に人となりて最も親しき友となり彼が悲しみの半ばを分ちたるも今よりは相知らぬ人となるべきを思ひ出してはなか〳〵堪へ忍ばれぬものあり。

「房子。我とても岩木の身ならねば悲しと思はぬ事やあらん斯く今相分るゝとも後々互に相忘れはせじ」。「………願くは今日の交りを忘れで度々我家を音づれてよ」。「然り房子。世の常の人は暫し相見ねば漸くに疎くなるが習ひなれど我は必ず君を忘れじたとへ君は我を忘れ玉ふ共。房子聞き玉へ昨夕我はかく夢みぬ君は遠く千里の外に去り玉ひ我はいたく年老ひて君が家のあたりを打ち過ぐるとてふり向き見てこは我が友なる美しき房子の君が里になんと獨語たりと」。

「君は已に博士に逢ひ玉ひしか？」。「然り母上と共に二たび三たび彼れが許を尋ねたり。彼もよき人なりし。………我は昨日母に請ひて斯く言ひぬ今一月程の間彼れと交りて互に氣前をも知らばやと」。「そはいとよからん。君は直ちに馴みて我と同じごと親しくなり玉はん」。

暫くありて彼は顏を上げて「さうして君は？………後には？」と問ひぬ。よりて我は母の言ふ所の佐藤と云ふものが妹の事を語りて其意に從はんと心を定めたりと明かに答へぬ。然らざれば我れ陰かに彼を恨むることなどもあらんかと疑はんことを恐れてなり。

去らんとするとき彼に向ひて我等かく相逢ひては人の疑を招くこともあらんと思へば今より後は何事にも彼が家に至らんことを告げたるに彼れは又別に用もなきことを答へたゝ婚禮の日

知せを待ちて誤りなく直に來よと云ひけり。寺の裏門を出で、彼は眞直にすゝみ我は左に折るゝ。彼が家の籬の邊まで行くを見屆けて歸るべしと思ひ道のほとりの塚の傍に立ちて眺め居ぬ。

この夜月おぼろにして夜の色は霧の立ち籠めたるように見ゆ彼れが行く土手の上には兩側に柳を植えたるが枝はいづれも皆地まで垂る。彼は今止まりて顧みぬ再び立ちもどらんとする如くなりしかど我が影は既に失せたればにや又進みぬ。又立ち止まりて手巾もて口蔽ひつ顧みたりしが又進みぬ。柳の間に消へては又見へ消へては又見へ遂に一片の白き手巾のみ見へかくれしが程なく消へ失せし。

歸りてこれらの事どもを具さに母に物語り又春の頃よりの文の言葉の哀れに見へしこと又先きの夜尼が庵の庭にて何事をか語らんとして言ひ得ざりしこと杯を話せば母は彼れが力を殞すはげにさる事もあらんなどと云ひ又病の起りし初めより日々尋ね來てさま〴〵の用を足せしとなどを語りぬ。

この後我は日々苦しき物思ひ胸に滿ちて寧ろ學校に歸らんと思ひぬ。そは友どちの心を置かざる面白き物語りに總ての事を忘れ得んが爲めなり。三年目の此度の歸省はまことに腸を斷つ計りの事のみなりけれど月日は程もあらせず之を拭ひ消さんかと思へば名殘り惜しきように思はる——我れ若し畫工なれば幾幅の景色に之を描き詩人なれば哀れなる歌に作りて忘るゝ時の思ひ出でにせん。されど我れに筆なく言葉なければ唯我が胸の中にたゝみ込め置きて後〳〵房子と相逢ふたびに之を語り出で、笑ひ草とせん。

萎るゝ花（八回）

母の病ひ今は全く癒へたれば我れは一たび學校へ歸らんことを請ひたりしに又見ん日は何時ならんも計りがたければ今しばし家にとゞまり又佐藤が家をも屢々尋ねて幼き妹にも親しくして歸るべしと云ひぬ。

佐藤が妹名は文子と呼ぶ。彼は母に聞きし如く兩親と兄とに勵まされて朝な夕な時を定めて怠りなく學び習ふゆへ業前みな人に秀づ。我は繁〳〵彼が家を尋ねてよう〳〵人見知りせぬ樣になりしゆへ時々家に伴なひ來りて遊ばせなどす。

幼きものは己が家にて餘り正しき扱の下にあるときは却て他

にあるを安く思ふものなるが彼も亦少しはかゝるともありてならんか家に歸らんとも云はざりし故我は益々馴ませんとして間の中の用などある時はわざと彼を使ひぬ。

我が父が持ちたる書は其卷の數一万に越えたり。こは如何なる貧しきに沈むも賣り拂ひなどせじとの遺言に因り家の寶として秘めり母は此度一通り之を日に曝し卷の數をも調べばやと言ひければ匣を開きて朝は之を出して間の内に敷き列ね夕べには之を取り納むるに文子して助けしめたり。

我れ又卷を開きて此新しき友を我が傍に坐らせて讀みつゝ解き聞かするに彼は何事にても精しく幾たびも問ひ返すにぞ我はなか／＼可愛と思ひて心なしや暫しは舊き友を打ち忘るゝ時もありし。

又は母と彼と三人にて夜燈火の下に相語ふ時もありしが我が此時の心地は房子と異るものあり何となれば彼が父は勅任にのぼり我は木の端の如き孤兒なれば身の程の均しからぬを耻ぢ羨むが如き心は絕へずありしこと今になりて之を知らる。されども我は又之が爲めに勵まされて今日志の半ばを遂げ得るに至りしならんか

房子と分れて後二十日計りを經て學校より我に向けて一封の狀の着きたり。こは大學校に入る者の中に我が撰ばれたるにて入校を命ずる書なりき。

日ならずして或る朝まだき菊地より使ありて今直ちに一たび訪ひ來れよとあり。よりて我は暇乞などをも兼ねて我が悅はしき沙汰をも聞かせんため菊地が家を訪ひに行きぬ。

昨日の夕ぐれ我は文子を連れて家を出でしづかに步みつ小島町の町はづれに來て目を放てば左に見ゆる菊地が家のあたりは白き烟の横にたなびけり。右に見ゆる妙圓寺の屛の內尼が庵のあたりは櫻の新芽生ひ茂れるを見て今より菊地が家を問はんかとふと思ひ出でしが又そのまゝ家に歸りぬ。

我は何時もの如く浦田の中の近路を通りて行きぬ。房子が見へかくれたる柳の下を過ぐる時我は再び相遇はんこと後めたしと思ひて此處より歸り去らんかとも思ひし。されども彼が賴みもあれば今唯一たび遇ひて來ん又折も得たらば文子の事をも語り聞かせん又彼が今日の裝ひの如何に美はしからん抔と思ひつ行きぬ。

家に入りたるとき何故にや物しづかに覺へぬ。晏起したりと

見ゆる婢は此方に來れとて我を房子が居間につれ行きぬ。居間の雨戸を少しづゝ明けて隙〳〵より僅かに光の入り來る。房子は病あるにや床の中に寢ねて彼が父母と幼き弟と枕邊にあり。母は袖もて顏を蔽ひうち臥して泣くと見へたり。父我に房子が顏を指したれば近く立寄りて見るに彼は目を閉ぢ頰の色は石灰のように生白し。枕の邊りには紙に包みたる白き粉末のこぼれ出で、湯呑み一つと錫の小匕一本とあり。

史傳

フランセス、ウイラード女史（其二）

幼時の遊戯

ウヰラード家にては男兒と女兒との教育を異にすることなく、何事も等しからしめたり、之れ男兒をして女兒を賤しむの考を去らしめんとてなり、ウヰラード女史自ら言へりし事あり男兒と女兒とをして同等の事を知らしむべし、之れ兩者のため甚た愉快にして害なく互に親しむを得るなりと、此はウヰラード家の如く社會を遠かりし家に於て然るを見る、女史其頃の狀を記して曰ふ「われ等の家には玩弄物なかりき故に父が手細工用の大工道具にて種々のものを造り、或は弓矢或は橇車を造りて遊べり、殊に兄オリバーは親切なる兒にしてわれ等を愛しみ當時の多くの兒童等の如く女子を賤しみ共に遊ばぬ樣の兒に非ずして、若し畠に行かんとすればわれを車に乘せ、獵に行けばわれを供なひし銃を授け共に獵をなさしめぬ、家に在りては共に手細工の玩弄を以て戯れぬ、只われは針仕事や臺所の用を好まざりき、之れわが常に外にありて遊戯をなす事の多かりしが爲めならん」と、女史の遊戯の內にて恐ろしきもの一ツを擧げんか、女史は前に言ふ如く弓矢鐵砲を用ゆる事を學びしか、嘗て棒の頭に標を付け妹をして之を持ち差し出さしめ、自ら彼方より矢を放ちて其の標を突き拔きし事あり、幸に矢は傍に立ちし妹に觸れず標に當りしが眞に危き事なりしならずや、婦人のウヰルヘルム、テルを演ぜしものか、是れ等の遊戯を以て後來世界婦人矯風會々頭に登り驥足を延ぶる人の如何なる境遇に在りしかを見るを得ん

牝犢とチェスクーフヰールド侯

女史は容易に負けぬ氣の兒なりき、兒の爲すことはわれも必

す爲さんとの大望を有せり、故に父が女史に馬を用ゆるを禁ぜば之に代ふるに牛を以てせり、父は女兒の馬などを用ゐて戯るゝヿの危險なるを知るが故に固く女史をして之を用ゆるヿを禁ぜしが、女史は中々止む兒に非ず、自ら思ふ牝犢は常に運動するヿをなさず、いでわれ之を用ゐて運動させん、ラブランドにては鹿を用ゐて車を挽かせ其他種々の事に用ゆるに決して不都合なし、われも今より彼の牛を用ひて馬に代へんと雇人より一對の馬具を借り受け之をダイムと呼べる牛に付け己の少さき鋤を結び付け畠に引き出したり、牛は能く女史の言ふ事に從へり、終には漸く馬の如く好く畠に用ゐらるゝ樣に至れりと。然れどもウ井ラード家の女兒は常に斯くの如く荒々しき業のみ爲せしには非ず、文明に尤も貴むべき禮儀作法を好く學べり、女史の母は其の子女をして時に書籍を頭上に載せて歩ませ以て身躰を正直になすを學ばしめぬ、又人を紹介し、人に紹介さるゝ時などの作法をも委しく教へたり、チエスターフ井ールド侯が禮式に付て其子に送りし書狀は女史がフオレスト、ホームに於て幾度も繰り返し讀まされし書なり、女史の母は常に注意して禮式を守りし又風釆の宜しきを以て人生の寶よりも貴しとせり。

原野の遊び

前にも述べし如くウイラード家は自然の内に在り、隨て動物は一家の友ともなり家族ともなれり、サキーと云へる豕、殆んど人と話し得るスチムピーと名づくる雞。屢々羊を害せしランカーと呼べる犬等を始めとして山羊鼠に至るまで悉く名を命じ家族の仲間となせり、女史には時として餘りと云ふべき行あり、女史嘗て畠に出でゝ葱を引き抜き居りしが忽ち大なる蛇隱れ出でたり、女史は恐れもせす尾を捕へて引き出せり、此は少しく戯みをも通り過ぎたる事ならすや、女史屢々槲樹の梢に登り好き坐を造り人を避けて樂しみし事あり、或は屋根に登りて樂しめる事もありき、春の日は家族と共に出でゝ種を播きて耕作し、秋の夜は平原を焼き行く野火を樂しめり、猛火は身を埋むる程の草叢を焼き拂ひて恰も焔の壁の如く煙は數千の煙突を合せたる如く、夜に入りては更に烈しく異形の怪物か躍りつ舞ひつ攻め寄するが如く、美しとも又すさまじとも言はん方なし

ヘーア、ピン

女史と雖も如何で長く騷ぎ廻るを得ん、終には一人前の婦人たるなり、是れ悲しむべきの時なり、女史が一生の内尤も好まざりし時なりしとか、女史曰ふ「世にはわれ程此のおどけなき戸外の遊戯を捨て裾長き衣を着け頭に數多のヘーア、ピンを頂くを厭ひしものはあらざるべし、其の苦は半も言ひ出し能はず、われ若し舊のまゝに自然の内に自由に置かれしならんには世人の爲すよりも十倍の事を爲し得しならん」と又嘗て雜誌に記して曰ふ「わが髮の毛は頭に卷き上げられぬ、頭には十八個のヘーア、ピンを頂かざるを得ず、足には厭はしき長き裾を引かざるを得ざるに至りぬ」と然れども女史は終は衣服改革者となれり、女史は己の衣服に依りて得し不便の經驗に依り之を改良せんとするなり、女史は決して今日の衣服を以て滿足するものに非るなり、

書籍の力

女史をして其の品格を成さしめしものゝ內書籍は尤も力ありたる事明なれども殊に幼年の節に愛讀せし書こそ其の力ありしものなり、其の第一に數ふべきは素より聖書なりし事論を俟たず、女史は一年中決して休む事なく日々聖書三章を讀み安息日には五章を讀むを以て規則とせり、次には少年用天路歷程なり之れ實に少年の愛すべき書なり、然れども之に勝りて女史が一生の方針に大關係ありしものは奴隸禁止主義なる安息日學校の小册子なる奴隸の友なる書なり、之を讀みて始めて四海同胞の主義を悟り正義の爲めに立つべきを知れりわれ未だ斯くの如き書を讀みし事なしわが此の小册子に負ふ處深しと、此の有力の書大さ實に郵便端書程なる小册子なり、次には小ダニエルと云ふ書なり之れ亦小册子にして同じく奴隸禁止主義なるものなり、之れ等は即ち女史をして世の改革者たらしめし書なり、科學的の事に關してはユースカピチットを愛讀せり、小說はウ井ラード家の禁物なりき女史十八才の時ブロンテの著書を讀む事を許されたり、然れどもアンクル、トムス、カビン」の如きショルダース、ノット」の如き主義の小說は讀むを許され、且つシェクスピアの著作の如きは熱心に誦讀され又ドンキホテ」ギル、フラス」の如きも許されたり。

フヲレスト、ホーム、トリビユーン

書籍に次で女史の一身に影響ありしものは新聞雜誌なり、女

史が幼少の頃より讀みしはマザース、アッシス、クント」とオへリン、ドリビユーン」となり、今フヲレスト、ホーム」に來りし新聞雜誌の名を擧げん先づ右に擧げし二種幷にユース、カビテツト」モーニンク、スター」マートル」ナシヨナル、レポヂトリー」レデース、レポヂトリー」ホルチカルチユリスト」アグリカルチユリスト」プレイリー、ファーマー」等にして後に至りプツトナム雜誌、ハーパー月報、ニユーヨーク及びノルス、ウエストルン、アドボケート」を加へたり、ウ井ラード家の子女は悉く之を讀むを許されぬ、只女史の父ウ井ラード氏は政治雜誌を取り之れのみは女史等をして讀ましめざりしか、女史は禁ぜらるゝがまゝに益々好奇心を起し節さへあらは密かに之を覗ひ樂とせり、女史の父は始めデモクラット黨なりしが後フリー、ソイラーの派に轉じ終に道德上の主義よりレパブリカン黨に入れり、斯くてニユーヨーク、トリビユーンはウ井ラード家に來る雜誌の一つとなれり女史も言へりし如く此の寂寞たる一地方に住むものをして大思想家の意見を聞かしめたるものは實に新聞雜誌の賜なりと境遇既に斯くの如くなれはオリバーが後に至りて新聞記者たらんと決心せしも偶然には非るなり、否な既に此の家庭に在りてフヲレスト、トリビユーンなる一頁三段の雜誌を編めり女史の母は詩文をオリバーは論說を女史は文苑の欄を擔當せり、女史十四歲の節に田舍の沈思なるものを新聞に投書せし事ありしが載する處とならず新聞社にても其の婦人の手に成りしものたりしを知らざりき、後又落葉と名けしものを作り自ら印刷に付せり、之れ女史が兄と共に當代に對して不平を述べしものなり、女史又郊村家庭の發達如何との懸賞問題に應じて賞を得し事あり、女史幼より詩歌を能くし十九歲にして敍事詩をものせり、之れ女史の母が幼より好んで之を敎へしが爲めにして女史が公務の暇に思想を慰むる最良のものたりき。

（未完）

摘要

〇孤學女院（信仰之友第十四號）

吾人は幾度か廣告主義の新事業を見聞する毎に、心密かに痛苦を感じたりき、之れ玉石を混じ、眞僞を誤られんとを恐るればなり、吾人は僞りなく喝采賞讚するが如く又遠慮なく駁論痛責せんを期す之を以て敢て妄りに論評を試しるとをなさゞしなり、默せよ然らずんは默するに優れる言をなすべし、吾人は洵に然か信ずるものなり、而して今爰に孤女學院に向て、新に數言を加へんとする所以のものは

其特性特色

を帶びたる事業なるとを云はんが爲のみ、初めて孤女學院の起るや、偶然の如くにして偶然に非ず、企てたるが如くにして企てたるに非ず、一小事業の如く、又一大事業の如し、一小慈善の如く、又一大慈善の如し、叨りに號叫して聲聞を天下に求むるとをなさゞるが故に、天下の耳目を糾合して之に向はしむることなかりしも、固より怪むに足らず、然れども一度王子の西趣瀧の川村に訪ふものは、所謂孤女學院の眞味を了解し得るなるべし、孤女學院は何が故に起りしか、一小事業なるか、一大事業なるか、一小慈善なるか、一大慈善なるか、清絶幽邃の佳境洒瀟たる建築の裡、呱々として乳を需むるの嬰兒、怜々として長に奉じ幼を護れる孤女三十五人、靄然掬すべきの音容を以て、無言の中一種云ふべからざるの說明を與ふるものあり、迎へて之に接すれば、万斛の感滲濟として生じ、默して之を思へば悽惋悲哀の情參差として起る、人は偶然の如くに此事業を起したりさするも、慈愛の天父は、幾千年の歲月を之が爲に供へ玉ひしなるべく、人は苦心鞠躬之を企てたるに非ずとするも、爲ぞ知らん天の一方に於て悠遠なる太古の日より企てたるものあるを、吾人は事業中の最大事業として、慈善中の最大慈善として、深く同情の念に堪へざるものあり、日夜斯業の祝福を禱りて止まざらんと欲す、而して其所謂

特性

とは創立の特性を云へるなり、吾人は創立者たる大須賀亮一君と親しく相知るものなり、君が眞摯至誠の女子教育者たるとは、公會の同志も均しく識る所なるべし、君が曩の日、立教女學校に於ける重大の責任あるをも顧みず、否幾度か顧みて、更に勝れる責任ありと感じ、決然として之を去り、去りて新に孤女學院を起す、由來如此、吾人は實に惑ひなき能はざりしなり、君は博愛の至情強く壓し來りて、思考之れに伴はず、匆々に女子教育者の地を擲ちて彼れに趣きたるなるかと思ひたりき、然れども吾人は君を誤解したり、君は實に女子教育者として其方向を轉じ寧ろ進步したるのみ、其告白の文中に云へるとあり曰く

前略仁人爲に孤兒院を設くる感謝せざるべけんや、然れども徒に之を養育成長せしむるに止まらず、更に教育上の期望を以て之を待し其器に應て成るべく完たくし之を開發教導せんと欲するに於ては孤兒を男女によりて分ち其各途に於て之を尤とも適する方向に誘導啓發するとの最良なりと信ず、
吾等從來女子教育に從事し密に一生を此事に任ぜんとを期せり久うして惟へらく普通一般の女子教育に至りては世別に之を任ずるの君子あり然れども孤女の教育に至りては今未だ專ら之に任ずるの人あるを聞かず吾等不肖と雖ども先づ之に當らざるべからずと終に意を決し敢て其使命を負ひぬ云々

と名けて孤女學院と云ふもの洵に謂れありと謂ふべし、吾人は世の所謂孤兒院と云ひ、育兒院と云へるもの、必ずしも肉躰の養育成長を以て滿足するものなりとは思はず、然れども女子教育の精神を以て孤女院を起す、見る所自ら常ならず、吾人が認て特性ありとなす、所以のもの實に爰に在りて存す、可憐の孤女、其肉救はれ其靈も亦救はる、之を聞くもの誰か感憤興起せざる、况哉所謂

其特色

の大に稱讚景慕すべきものあるに於てをや今の世は漸く澆悖に流れ、今の人は次第に薄情に奔る、自ら立たずして他人を立たしめんとし、自ら動かずして他人を動かさんとし、自ら一滴の涙を灑がずして他人をして慟哭せしめんとす、此故に世に煽動教唆的の事多くして、至誠協同の事なし、此の如きの人は常に自家の目的を明かにせんよりは、寧ろ手段の巧拙を研究せんとに齷齪汲々たり、何故に之を爲すやを知らずして、先づ如何にせば之が爲し得るやと問ふ、吾人は此等の精神なき、誠實なき、而して亂雜不秩序なる、弊風傾向の、遂に吾等同志者等間にまで侵入し來るものあるを見痛歎措く能はざるものあり、此際にみ在りて獨り孤女學院は大に然らず、信念極めて摯實、希望極めて高尚、滿腔の熱情溢れて禁せざるものあり、然る後初て斯業の創設せられたるを見る、大須賀君先づ自ら千數百圓の私產を擲てり、千數百圓の金多しとするに足らず、然れども之れ君が財貨上の全力を決意したるものにあらずや、思ふに千數百圓の金は數月にして消失すべく而して孤女の數に限りなし、算盤の外に永遠に亘りて疑ふとなき大豫算を有するにあらずんば、何を以て能く此美にして大なる事業を起すとを得んや、君嘗て我輩に告げて曰く、

吾等素と富まず然れども孤女に優りて有る所のものは悉く孤女の爲に義捐せんとす……人若し義捐するものあらば、謝して受けん、若し補助するものあらば、仰で之を受くべし、されど自ら進で義捐せよ、補助せよとは叫ばざるべし、：：皇天もし吾等に食を賜はずんば孤女と共に餓死せんとす而して皇天もし孤女と吾等に一日の命を與へば則與に一日の課を學ばん云々

之を之れ彼の聲聞を求め、寄附金を得んが爲にのみ全力を効し汲々として、乞丐然たる事業に比せば果して奈如、彼等は自ら一金を擲たずして他人の財囊を傾けんとを望む、其算盤以上に信ずる所は、唯て他人の意思のみ、故に能く廣告す、能く吹聽す、其聲、響然洞乎として、千里の外に達するの力あり、顧みれば寒腸石の如く冷々として今世の所謂葬式僧侶の如し彼等は怜悧なり然れども立つに至誠なく彼等は敏捷なり然れども動くに熱情なし、思ふに能く數年に堪へん、爲ぞ能く久しきに繼ぐべけんや、而して顧て孤女學院を見よ、彼れ能く泣く然れども人を見て泣くに非ず、彼能く語る然れども人に向て語るに非ず、密室の裡、清襟正坐して天父に泣き上帝に語るの外、敢て泣かず敢て語らず、雄々として天の使命に之れ應ふ、之れ豈一の大なる特色にあらずや、世には上帝を信ずと云ひて、實は人意に依るの輩多し、而れども彼の信仰は眞面目なり、單純なり、上帝人心を慫慂して助けを與へ玉ふと云はずして、上帝自ら助け玉ふべしと信ず、吾人は彼の信仰の如く彼の成効を信じて疑はざるものなり、然れども人事の常患たる飢餓疾病は孤女學院の爲に存在するものなき能はず、吾人は之が困難の既往にあらずして、寧ろ將來に横るものなきかを畏る、大須賀君たる人、思ふに日夜之が警備を忘るゝとなかるべし、吾人は以上の言葉を呈して公會の同志に告ぐ、嗚呼公會の人々よ若し一錢の金あらば、之を祝して上帝に捧げよ上帝は之を用ひて孤女學院を維持し玉はん、希くは起てよ、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◉棄兒統計（棄てられたる月）（統計學雜誌）

月次	一月 男	一月 女	二月 男	二月 女	三月 男	三月 女	四月 男	四月 女	五月 男	五月 女	六月 男	六月 女	七月 男	七月 女	八月 男	八月 女	九月 男	九月 女	十月 男	十月 女	十一月 男	十一月 女	十二月 男	十二月 女	合計 男	合計 女	合計 計
明治十年	一	三	一	二	一	三	二	二	二	—	一	一	四	二	一	—		—	一	三	二	一	二	—	一八	一七	三五
同十一年	二	—	二	三	一	—	—	—	二	二	—	—	一	—	三	—	一	—	三	一	—	二	二	—	一七	八	二五
同十二年	四	五	一	一	—	二	二	—	二	二	三	二	—	二	—	二	三	一	四	一	二	一	二	六	二三	二五	四八
同十三年	三	一	一	—	二	二	一	四	一	一	五	四	四	二	四	二	三	一	五	二	四	二	二	七	三五	二八	六三
同十四年	一〇	五	九	三	三	—	六	四	一	—	三	四	八	三	一	三	四	—	—	一	四	三	四	—	五三	二六	七九
同十五年	三	—	四	二	四	—	八	四	—	一	二	三	三	一	一	二	一	四	—	一	三	三	一	二	三〇	二三	五三
同十六年	三	二	四	二	五	一	四	三	二	二	—	三	四	—	七	三	三	—	四	二	四	一	二	二	四二	二一	六三
同十七年	二	三	二	二	—	三	一	四	五	二	一	—	一	一	四	—	—	一	五	三	一	二	二	—	二四	二一	四五
同十八年	一	一	一	二	三	二	三	一	五	一	一	五	五	二	—	四	六	六	六	二	四	—	四	—	三九	二六	六五
同十九年	二	一	四	二	二	一	三	—	三	三	三	三	五	四	一	二	五	三	—	二	二	—	—	三	三〇	二四	五四
十ヶ年合計	三一	二一	二九	一九	二一	一四	三〇	二二	二三	一四	一九	二五	三五	一七	二二	一八	二六	一六	二八	一八	二六	一五	二一	二〇	三一一	二一九	五三〇
	五二		四八		三五		五二		三七		四四		五二		四〇		四二		四六		四一		四一		—	—	

本表示す所に依れば最多の月は一月、四月、七月にして最少の月は三月、五月なり

時事

○年終る

廿五年將に終らんとす。顧みれば、過來し方いつも殘り惜しといへど、將來の希望春の來るを迎ふるが如く、樂しみ極まりなし。此の一歳は、保守的反動殆んど挫けて、進歩の光照り初めたる歳なり。愈いよ、來ん年は、女子教育の再たび勃興すべき好機會なるべけれ。吾同志の人と共に、目をのごひ、心を清くして、其來るを歡迎せんとす。

○岡山孤兒院

岡山孤兒院甚はだ危ふしと報じ越したるものあり、太たく憂ひて神前に跪まづくこと數日ならず、更に恩寵の降りしとを告げ來れり。左るにても、石井氏夫妻、此の寒天に衣一襲をすら有せず、衾中に斷食して天助を請ひたるに、數日間何人も之を知らざりしとなり、然れども、見ざる所なき靈は早く之を見、限りなき人の眞心を用ひて、之に助力せしむ。天恩と仁人の好意と、切に之を感謝せざる可らず。讀者、本號孤兒之友欄内を參看せよ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女報

可愛子稿

●御肖像　聖上　皇太后宮　皇后宮三陛下の御肖像販賣の義は、今度默許に付せられしに付ては、販賣者に於て自然不敬に渉る等の所爲無き樣、其筋に於て嚴重に取締ることになり、左の心得方を定めたり、

御肖像販賣取締心得

一聖上　一皇太后宮　一皇后宮　一東宮

右御肖像と認むべき寫眞畵銅石版畵水畵油畵木版の御肖像等は其尊號を標記しあると否とを問はず總て御肖像と視做すべし

一御肖像は不敬に渉るべき場所に揭け又は陳列せしむべからず

一御肖像は露店に於て販賣せしむべからず

扇子團扇陶漆器織物際物其他引札類又は翫弄品等に御肖像を畵かしむべからず

●行啓　皇后陛下には、去る十三日午後二時、宮城御出門にて、青山御所へ行啓あらせ給ひ、皇太后陛下に御對顏、黃昏頃還幸あらせられたり。

●還曆御祝儀　皇太后陛下は、故前關白左大臣九條尙忠公の六女に亘らせられ、天保四年癸巳十二月十四日に御誕生ましませば、明年は還曆の御祝儀を行はせらるゝ御內定にて、御式は光格天皇の皇后新淸和門院欣子內親王の御還曆式を用ひらるゝやにて、在京都孝明天皇奉仕の女儀方は、献納品考案中なりと。

●國會に於ける婦人の傍聽は本年も少しづゝあり。

●女子高等師範學校生應募　東京府に於ては、此程より女子高等師範學校生徒應募集中なりしが、本年は應募者極めて少く、去る十五日の〆切迄に志願者漸く十七名、昨年度に比すれば殆んど三分の一に減少せりと。

●婦人會演說　去る十日午後二時より中六番町十番地會堂に於て、米國醫學博士ホイトニー氏の「眼の不思議なる組立」と題する演說あり、傍聽無料なれど、婦人の外入場を許さゞりしといふ。

●天理敎會（一名藥人手踊り敎會）一種の神敎あり、天理敎會といふ、深川黑江町に其本部を置き、府內各所に其分會あり、然るに同じ天理敎會中にも唱詞のみを唱へて祈禱する一派と、神歌及び手振り（舞踏）をなして敎義とする一派とあり、現に京橋區內にて神歌の踊りをなす新富町の敎會は、疾に布敎を差止められしが、其後神田區田町二丁目乾物商中代萬吉（天理敎會主）も、矢張り手踊りをなす敎派を率ゐ、夜々男女の神徒をなして猛踊的手振りをして、唄ひつ舞はしめつして布敎せしより、先月中警視總監は風紀を紊るものと認め、其敎會に對して布敎を差止めしを、中代萬吉は服せずして、同月下旬警視總監を相手取り、命令取消の訴訟を提起したり、代言人は到底原告天理敎會に勝訴の見込無きものとなし、本訴取下の意見を有し居れども、敎會は飽迄も此命令を取消さんと熱望せる由、備此の天理敎會の會長と呼ものは、何れも十五六才なる妙齡の女姓にて、常に紅粉を粧ひ、髮飾を締ひ、衣服は白無垢に紫色の袴を着け、羽織は普通女流の用ゆる年頃似合の最華美かなるを纏ひ、信者の請に依り、崇め祭る天輪王の前にて祈禱するなり、又求によれば種々の呪咀をも行ふ由にて、熱心なる信者は賽錢の外に三圓五圓、乃至は十圓位寄進する者もありと云ふ、又八丁堀松屋町の天理敎會々長は、川幡某と云ふ十五年許りの美人にて、是は旣に蠣殼町二丁目へ移轉したりと云々。と朝野新聞に見へたり。

●少女身躰假差押の續聞　去る頃の紙上に記したる淺草三好町五番地篠原惣藏の孫おしげ十三年より、鉄血義團壯士大關道太郞、及び父惣太郞に對し、道太郞の養女となるを拒み、復籍請求の訴を東京地方裁判所に提起すると同時に、おしげは自身の身躰の假差押へを願ひたる事件は、過日同衙に於て原告おしげの勝訴となれり。

●大學第一醫院失火の原因　去五日の夜燒失せし帝國大學第一醫院婦人失火の原因は、同室二階患者室の隣りに醫員の當直室あり、當夜當直の醫師は未だ來らざりしが、看護婦は例の通り醫師の寢道具を敷き、煖爐に火を焚付け浴室へ下り行きし其間に、焚付たる煖爐の火は俄に燃へ廣がり、遂に火事となりしが、看護婦は夫と聞より少許の水にて消止めんとせしも、到底其見込なければ、早速一同に急報し、婦人科の患者三十名、同眼科の患者二十名を、醫師其他の人手を借りず、同院に詰合せし看護婦のみにて他へ移し、患者には聊かの過ちなく、之が爲め看護婦は自分の品物は何一つ出だすこと出來ざりしといふが、斯る火急の場合に、婦女子の慌て易きは常の事なるに、左はなくして能く其職を思ひ、甲斐〴〵しく患者を移せし手際は、流石は大學の看護婦なりとて、聞くもの悉く感じ合へりと云ふ。

●ウエスト孃の最期　孃が去る一日加州金澤の客舍に病歿したることは前號に記したるが、初め孃の病に臥すや、自身も差したる重き病氣とは思はず、故に侍者より醫藥を勸むるも用ひず、二三日は謙て所持の藥を服用して加養し居たるが、後には追々病症重りて、棄置かれざることを知りしかば、初めて醫藥を呼び療養に手を盡したれども、其甲斐無く、病勢日夜に漸みて氣息奄々、今は頼み少くなりしにぞ、介抱の人々は孃が他鄕にありて病危篤に迫り、嘸や心細からんと、其心中を察しさま〴〵に慰めけるに、孃は巳に起つべからざることを知り、所詮今回は助かるまじ、天外萬里日本加賀金澤の土となるも、何かの緣ならんと語り、其

外は何の遺言もなく、盜端として絶息し些かも悲しめる色無く、涙一滴こぼさゞりしは、さすがに世界を股にかけて、大事業を成就せんと奔走せる女丈夫なりと看護の人々皆感じ合へりしとぞ。（讀賣新聞）。

●故ウエスト孃の遺骸　同孃の遺骸は去る十五日夜十二時五分、新橋停車場に着したり、同所には巡査數十名出張し、出迎ひたる人々は末弘巡査本部長、樋脇愛宕町警察署長、山田赤阪警察署長、婦人矯風會々頭矢島楫子、同副會頭潮田千勢子、北海禁酒會々長伊藤一隆、米國公使館譯官ドクトル、ホヰトニイ諸氏、及會員知己の諸氏にて、十六日曉一時停車場發棺、途上は山田赤阪警察署長護し、赤阪病院に送棺したるは同日午前二時頃なりしと云ふ。

●故ウエスト孃の葬式　十二月十六日午前十時、麻布鳥居坂美以教會に於て執行し、終て午後一時十分新橋發の列車にて橫濱に送棺し、橫濱にて又葬式を執行せられぬ、會衆孰れも多く、打しめりて追惜せり、遺骸は二十日發の船にて米國に送られたり。

●故ウエスト孃の追悼演說　は去る十八日午後二時より木挽町厚生館に於て開會、內外諸名士の演說ありて盛會なりしといふ。

●卵面の繪畫　露西亞軍艦「ツイテヤジ」號附の司祭イラリオン師は、巡洋の途次、南アフリカ洲のカプスタト港に於て、駝鳥の卵一個を求められしが、こは歸國の上、某貴顯に、基督復活大祭の祝物として贈らん爲め、彩色畫を施さんとて、（基督復活大祭に鳥卵の殼に彩色を施し、或は聖畫を畫けるは、東教會古代よりの風なり）本邦に碇泊の際、適々正教會聖像抽寫館を訪ひ、畫工山下りん女史に聖畫を施さんことを依賴せられたるが、此程出來せしに付、女史に請ひて一覽せしに、主基督の復活の有樣と、聖神が其門徒に降りたる所とを畫けり、駝鳥の卵なれば、大なりとは雖も、固より一個の卵面に、十餘の人物を畫けるものなれば、其精細なるを知るべし、殊に數年經驗の筆なれば、其巧妙なると筆紙に盡し難し、同姉は、嘗て露國に遊び、多年聖畫を硏究せられたりしに、今に其筆の、該國に玩ばるゝに至るは、女史にとりて名譽なるべし、因に記す、昨年露國皇太子御來遊の節、日本正敎會より捧呈せし聖像も亦、同女史の筆なるが、右聖像は、殿下御歸國後、其宮中に掲げて賞玩し給ふ由、此程聞及びぬ。（裏錦）。

●信仰之友第十四號　は其社說に於て孤女學院を論じて、深く同情を表したり。

●如是我聞　女子の身を娼廓に投ずる者、年に三百二十、即ち日に約一人、泣て樂む稀にして笑ふて苦しき境に在る者也、酸鼻の極。（東京日々新聞）。

●女生徒外國婦人の病を勞る　栃木縣宇都宮町高等學校の女生徒が、日光へ紅葉見物に出懸け、社殿を拜覽する折柄、三名の外國婦人が東照宮奧殿の石段にて、頻りに苦しみ居る躰に、一人の稍英語に通ぜる女生徒が、其容躰を尋るに今、此石段へ懸ると俄の苦痛、去れど持合せの藥はなし、不案內の土地とて殆ど進退に谷まりしとの答に、女生徒は深く氣の毒に思ひ、同所の案內人を賴み、社內の一隅を借受け、種々介抱したりしかば、次第に苦痛薄らぎて、深く女生徒等の厚意を謝し、妾等三人は二週間前米國より嚴寒を避けん爲め、御國に渡りし母子にて、日光の壯觀は豫々聞及べるより、何を措ても見物せんと此地まで來りしに、圖らず此苦痛、未だ一面の識なき貴孃等に厚き御介抱を受し段々、貴國人の信切を國への土產に致すべしと、交る〴〵禮を述べ立別れしよし、感ずべき女生徒といふべし。（中央新聞）。

●褒賞下賜

長野縣信濃國諏訪郡豐田村　宮下ひさ

品行端正兒女教育の忽にすべからざるを辯知し姉及び姉夫の死亡せし以來自身一家の生計を負擔し傍らその遺孤三人を就學せしめ各その科程を卒らしむ又父母の老衰病に臥すや日夕傍に侍し藥餌溫凉心を盡す等數年一日の如く其性行洵に奇特とす其賞として金壹圓五拾錢を下賜す

明治廿五年十二月五日　長野縣知事　從四位勳三等　淺田德則

●高知赤十字社娼妓福引事件　前號に記したる同事件は高知縣下の大問題となり、同地の新聞の如きは、日々其褻瀆不敬を鳴して、早く其當路者を處分せよと痛論したりしが、當日の周旋掛赤十字社正社員正延專吾氏は、自ら其責を引き丸岡委員長の手を經由して、左の書面を、東京なる同社長佐野子爵の許に差出し、一先段落を告げたりといふ、

去廿七日巴塘得月樓に於て赤十字社懇親會之節餘興之儀は私擔當仕候處福引の儀は復た之を雇人共へ相任せ候に其福引中娼妓二時間と記載あるものに不心付之を抽籤せしめたるは全く私の不注意より起り候儀にて爲に其本社の躰面を汚し深く恐縮之至奉存候就而は此儘社員に列居候に不忍候條退社仕度此段上申候也

明治廿五年十二月一日　正社員　正延專吾

●婦人財を擲ちて石橋を築く　肥後國阿蘇郡の蓬萊川といふには、嘗て木橋の架りあるも、洪水の爲めに年々流失して、其都度大いに不便を感ずれど、堅牢のものに改造するには、多くの費用を要する事なれば、不便ながらも其儘になし來りしを、字照瀨といふ所の山野金太耶の細君しげ子といふが此を憂ひ、斯くては往來の人の不便のみか、近邊村々の盛衰にも關はる事なれば、如何にもして是を改造し每年生ずる不便の根を絕ちたしとの願ひを發し、夫を助けて家を理める間には、非常の勉强をなして金子を貯へ、又我髮飾り衣類などは成るべく節減して餘りし金子を殘し置き、本年七月までには、追々積りて貯金の高三百餘圓に上りたれば、關係ある人々に就きて、該橋改造の素志を述べ、今石橋になし置かば流失の愁ひ更になく、隨つて交通の不便も生ぜざれば、幷が費用になし下されと、右の金子を出したれば、關係者も大いに感じて、直に其日より改造に取掛り、此頃全く改造の功を竣りし由、扨其構造方は橋身より欄干に到るまで、悉く石にて造

り、犧牲さては一本も用ひざれば、洪水に逢ふさも從前の不便を感ずるとなかるべしさ、皆々悅んで去月卅日に盛んなる開通式を行ひし由。（改進新聞）。

●縣會議員宮城女學校を參看す　去る十五日、宮城縣會議員の多くの人、相伴ふて、仙臺なる宮城女學校を參看せられたり。

●札幌女子小學校及幼稚園の移轉式　豫て新築中なりし札幌女子小學校及幼稚園は、工事落成し、去る十五日を以て移轉式を擧行したり、今其槪況を記せんに、門前には國旗を交叉し、運動塲を以て式塲に充て、來會者は鈴木北海道廳長官代理各高等官各課長、永山司令官以下各將校、區吏員、總代、各會社員、各學校長及び新聞記者等無慮百餘名にて、軈て午前十時を報ずるや、敎員は生徒を率ひて參塲なし、次て校長の案內にて來賓參塲、校長式を始むる旨を述べ、敎育に關する　勅語を奉讀す、（此間最敬禮唱歌君か代）次て長官代理、林區長、總代人、敎育課長の祝辭あり、右終りて來賓には茶菓の饗應あり、其散會したるは十一時過なりし、又幼稚園には幼稚の造りたる種々の手工物を陳列しありたるが、孰れも其巧みなるには感賞したりさいふ。

●宮城縣通信

◎廢娼請願書　宮城縣加美郡宮崎村の山田喜平治氏外數名には今度本縣會に向て廢娼請願書を差出したり。

●上州通信

◎岩鼻婦人積德會々況　同會は去月新嘗祭日午前十時より上州西群馬郡岩鼻町川勝屋に於て總集會を開き、會計書記の報告あり、會則に改正を加へ、役員改撰を行ひ當撰せしは、並木せい子、林つれ子、前島千代子、梅澤さう子、吉村てる子等にして、午后は會員の感話あり、當日前橋より聘せしパメリー孃は辻しん子の通辯にて敎育演說をなし、閉會を告しは三時なり、傍聽者凡そ百有餘名ありき。

●露國皇后陛下名譽武官に任じ玉ふ　露國皇帝陛下には本年六月二十六日、聖彼得堡府に於て、左の件を勅令あらせられたりさ云ふ、

皇后陛下を以て露國近衞海軍名譽長さす

海軍元帥　アレクセイ奉

●露皇露妃痲院に臨む　九月初ペエトルスブルクに虎列剌流行せしや、當時露帝はフインニの地に旅行したりけるが、幾もなく歸京して、流行の狀況を問ひ、さて九月五日俄に虎列剌病院に親臨せられき。此事俄に仰せ出されければ、知るもの絕えてなかりき。帝は從者をもつれず、妃さ二人にて病院に趣かれぬ、初め婦人部、後に男子部に臨まれ、一々親しく患者を慰問せられければ、後此報を聞きたる國民は帝の勇氣さ慈心さに感泣したりさいふ。

●テーコン夫人　エドワード、テーコン氏の夫人は不幸にも離婚を法庭に訴へたり、其の口實さする處はテーコン氏の取扱が殘酷なりさ云ふに在りて、結婚後一ヶ月以來夫人が被りしさ云ふ殘酷なる事件をならべ、或は毆打擲着し或は冬期旅店の主人に命し夫人の爲めに炭を與ふるを禁せしめたりし等の事を擧げ、猶ほ原告はテーコン氏か小兒を苦しめ家族をして悲慘の中に陷ち入れしめたりさ上告せしが、此の訴訟は法庭の却下する處さなれりさ。

●禁酒病院の報告　に曰く前年度に於て本院に入院せし患者百二十一名、取り扱ひし病氣の種類百五十七種、全愈百三十九快方に趣きし者十二、病勢の加はりしもの六、外科治療百三十一名、婦人百〇三名、男子十八名、外來患者三百二十九名、死者の比例二さ四分の一、受け取りし書狀の數千四百三十六通、發行せし「リーフレット」八千册、患者の人種分け十三種、病人の職業二十五種、住所の區別十三州、看病婦たらんとを望み申込を爲せるもの七十六名なりさ。

右報告終りて來年度の理事員を撰擧せしに左の人々當選せり會長エム、イー、クライン夫人、副會長ゲエー、ホッブス、夫人記錄書記エラ、スナイダー孃、通信書記ラルフ、グリーンリー夫人。會計クリスタ、ピザロー夫人、

右禁酒病院は米國に在りて現今同院の會友たるもの僅かに四十人なれども遠からずして其の數、數倍に至るべしさ、藥劑にアルコールを用ゆるの可否は目下の問題なれども六年間同院の報告に依れば之を用ひざる方安全ならんさ、猶ほ英國の禁酒病院は男子の助けに依りて成れども、此の米國なる病院は全く婦人の手に依りて成れるものなり。

●婦人會議　米國なる萬國婦人會議は來年五月に開かるへき世界婦人總會議の準備に取り掛かれり、此の會議の日數は一週間以上にも及ぶべく、其の內一回は大劇場を借りて公開の集會をなし、五回はシカゴ美術公堂に於て開かるゝ由、之れ古來未曾有の婦人大會議なるへし、又此の會議に於て婦人嬌風會の問題は重要なる議題たるべしさ。

●ピッドウエル夫人　禁酒派の大統領候補者に擧けられたる人の夫人アンニー、ピットウエル氏は其の所有地內に米國印度人の往居するを許し、夫に繼ぎて其の敎育訓導に從事せり、夫人は旣に七年間日々之が爲めに特別なる時間を割き、凡ての費用を負擔し居れり、千八百八十四年婦人傳道會社の助けを得て完全なる學校を組織せり、夫人の訓導を受けし印度人は皆平和にして勤勉なるものなりさ。

●メリー、クレメント、レビット夫人　は此の冬期を布哇に於て過さるゝ由。

孤兒之友

岡山孤兒院の窮迫

畜勸子編

世に孤兒程憫然なる者なく、世に此憫然なる孤兒のある以上は、世に之れを養育するの義務あるなり、吾人に此義務なしとせば、世にも亦此義務あるとなし。故に博愛の士一身を捐て一生を擧て、皇天の使命を負ひ其冥助を得て任ず、玆に於て孤兒を敎育すると、實は公共の分業なりと臆斷す。因て孤兒敎育の專任者が其需要は、世之を供給せざるべからず、世が之を供給せざるが故に、孤兒敎育の事業止まば、其責彼にあらずして世にあるなり、然れども若し孤兒院なるものが、世上の博愛家が涙を以て投ずる所の物をして、其道を失し其要を誤またば、其責更に大なり。

吾人此頃岡山孤兒院の内情を聞て、驚駭殊に甚し、院主石井十次君、此寒氣凜々たる季に際し、着るに衣なく夜具を纒ひて纔に寒氣を凌げり、其二百名の孤兒は喰ふに物なくして既に二晝夜を過せりと、實に今回の如き困難は岡山孤兒院創立以來曾て未だなきなり、蓋し孤兒院は時に非常の困難に遭遇するとを免るゝ能はざるも、此度の如きは格別なりと云ふ、抑も同院が今回の非常なる困難の原因は種々あるべきも、就中甚だしきものは、本年盛夏の季、兵庫岡山兩縣下に於て、近年稀なる水害を蒙りたるが爲に、兩縣の人民は困窮し、纔に官民の救恤補助によりて棲息する者、幾千万なるを知らず、此縣民すら斯の如し、况や同縣民の孤兒を顧るの時ならんや、故に遠に寄附の道を斷れたり、又晩夏以來米價追々騰貴して一層の困難を來し、今や殆ど其極に達したり、然れども、石井君は素より信仰の人にして、敢て之を他に訴へず、忍びて試練せり。頃日石井君の舊知中村靜子女史、岡山孤兒院の内情を最初に知りて、之を世上に訴へられたり、爲に横濱のフエリス和英女學校の有志者は、直に義捐金を募り取敢ず金拾三圓を送られぬ、又同校の西洋敎師も石井君に洋服數點と金拾數圓を寄送せられ、又同校の敎師生徒は孤兒の爲に衣類を集めて遞送せられたり、且又同校は本年のクリスマスを廢して金三十五圓餘を岡山孤兒院に送らる、其他の有志者も寄附せられんとす、然れども何分二百名斗の人數に滿たしむると甚だ難し、故に希ば慈善博愛の兄姉諸君の同院の爲に祈り、其急に應ぜられんと偏に冀望す、就ては金錢物品送附手續煩勞の諸君は我孤兒の友へ一報を玉へば、其手續を辨ずべし。

贈物

歳暮　クリスマス　歳玉

孤女學院製

白紺、木綿品
状袋、卷紙品々

右御購求あらんとを請ふ

女學雜誌社内　孤兒の友

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

仙臺孤兒園報告

自九月一日至十一月卅日

一金五錢　仙臺　早坂氏
一金五錢　仝　木幡富次氏
一金五錢　仝　奥野氏
一金壹圓　仝　土田熊司氏
一金貳拾錢　仝　須藤鷲郎氏
一金參圓　四日市　婦人慈善會
一金參拾錢　仝　某氏
一金五十錢　仝　石原伴藏氏
一金拾錢　仝　藤崎元和氏
一金拾錢　仝　井上健二氏
一金六十錢　仝　下里貞二郎氏
一金五錢　仝　直井堯矩氏
一金壹圓　仝　齋藤永頼氏
一金五十錢　仝　唐澤造酒氏
一金五十錢　仝　鐸木近吉氏
一金四十錢　鶴岡　大石憲英氏
一金貳十錢　福島　伊藤峯吉氏
一金三十錢　廣島　岩附義彦氏
一金貳十錢　仝　山縣馨氏
一金三十錢　仝　星野キヨ氏
一金五十錢　仝　武藤コウ氏
一金貳十錢　仝　鈴木ナホ氏
一金十錢　仝　沖ウタ氏
一金貳十錢　仝　無名氏
一金貳十錢　仝　仝
一金貳十錢　仝　仝
一金壹圓　仝　關屋長枝氏
一金貳十五錢　鶴岡　秋保近親氏
一金五十錢　廣島　高井御老母
一金貳十錢　仝　山下英行氏
一金貳十錢　仝　八田金三郎氏
一金五十錢　仝　某婦人
一金拾錢　仝　某氏

一金壹圓　岩沼　菅井善藏氏
一金貳十五錢　鶴岡　秋保近親氏
一金拾錢　相馬　眞船氏
一金五十錢　仙臺　唐澤造酒氏
一金五十錢　仝　鐸木近吉氏
一金拾五錢　相馬　高城カノ氏
一金拾五錢　仝　同御北堂
一金拾五錢　仝　同御隱居
一金拾錢　仝　櫻岡フミ氏
一金拾錢　仝　仝三ツ氏
一金五錢　仝　仝ヒデ氏
一金參錢　仝　鎌田御老母
一金參拾貳錢　仝　吉田マチ氏
一金貳十錢　廣島　品川ユウ氏
一金貳十錢　伊豫大州　菊地平角氏
一金參十錢　相馬　吉田マチ氏
一金拾五錢　仝　高城カノ氏
一金拾五錢　仝　仝御北堂
一金拾五圓九十錢　岩代飯坂町　日本基督會信徒
一金拾錢　相馬　池田卓造氏
一金五十錢　仝　中野眞氏
一金貳錢　仝　桑島リン氏
一金拾錢　仝　鎌田眞人氏
一金五錢　仝　櫻岡ヒデ氏
一金五十錢　仝　鎌田タイ
　　　　　　　　仝クニ
一金拾錢　仝　岡和田イチ氏
一金拾錢　仝　武戸テウ氏
一金貳十錢　仝　岡和田ハル氏
一金五十錢　仙台　鐸木近吉氏
一金三十錢　仝　眞山亘氏
一金參圓　仝　瀬成田勉氏

同寄付物品

一聖丹五袋　仙台　布施淡氏
一木綿壹反　仝　仝
一浴衣二枚　仝　仝

一郵便切手拾枚　吉岡　吉田潤次郎氏
一醬油壹樽　仙台　須藤鷲郎氏
一薪壹輛　仝　岩井長太郎氏
一野菜　仝　仝
一古着壹包　相馬　吉田龜太郎氏
一古着壹包　四日市　堀内雅樂次郎氏
一古着壹包　仙台　押川ツ子氏
一野菜　仝　仝
一女學雜誌赤表毎週　東京女學雜誌社
一下駄壹足　仙台　佐藤禰松氏
一机壹個　仝　中島氏
一木綿壹反　岩沼　樋地喜惣治氏
一牧畜雜誌數部　東京　藤井米八郎氏
一着物及足袋類二包　相馬

櫻岡フミ、立谷セキ、高城カノ、高城セキ、佐藤トシ、鎌田フジ、志賀タイ、中野御老母、中野カツ、高城スイ、遠藤リン、野崎姉、島タカ、吉田マチ、守屋イノ諸氏孤兒北海移住チキ、夜通シニテ裁縫シ態々送リ越サレシモノナリ

收入之部

一金六十四圓五十五錢三厘　收金高

内譯

一金三十九圓三十二錢　寄付金
一金六圓九十二錢五厘　物品賣却代
一金三十錢八厘　八月分殘金
一金拾八圓　北海孤兒院ヨリ送付

支拂之部

一金六十四圓四十錢九厘　支拂高

内譯

一金拾七圓七十六錢五厘　穀類
一金壹圓貳十錢　書籍新聞紙類
一金四圓　屋賃
一金參拾六錢五厘　藥價
一金壹圓三十二錢五厘　肉魚類
一金貳圓四十二錢六厘　寄物類
一金六十四錢五厘　器具代
一金貳圓六十一錢　郵便、電報、
一金參圓四十五錢七厘　薪炭味噌醬油類
一金六十三錢九厘　理髮湯錢類
一金六十三錢五厘　履物代
一金四十錢　寫眞代
一金拾貳圓貳十三錢　北海道往復旅費
一金拾六圓七十三錢二厘　孤兒北海移住旅費

差引殘金拾錢四厘
十一月三十日北海孤兒院へ移轉ス

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學生

第三十號

十二月廿一日發兌　一冊價四錢

社説

謹は默禮なり……………天知子

時の感

歳將に暮れんとす。女流文學。明治廿五年文界

一葉女史。裏錦。日本文學史。近刊雜書。

詩歌の卷

漫筆

山里の友……………………秋月澄子

友松を訪ふ……(女子學院)……なぎさ

昔ばなし

詩人クーパー

榎本其角と大高源吾。

文欄

卒業に際して……(立教)……堀塲いと子

故郷を思ふ……(共立)……無名子

學業に就ての志想…(女子學院)…後凋女史

女子の務……(梅香崎)…小久江てい子

文評

學の栞

拾遺集和歌集に付て。

女學雜誌社

電話九六九號　内外　國醫學士出張

診察午前八時至十一時　日曜休

赤坂區氷川町　赤坂病院

社告

陳謝

本年中に掲載すべしと預約し又覺悟したる論説にして未だ掲げざるものあり日月早卒として既に本號終刊に至り恐謝の情に堪へず。たとひ、歳を踰ゆとも、草稿落掌次第追日に掲載すべく候。

女學雜誌社編輯局

歳暮新歳の贈物

木村鐙子之傳	全一冊	正價金八錢	郵税金貳錢
子供のはなし	全一冊	正價金五錢	郵税金二錢
西洋女禮	全一冊	正價金拾二錢	郵税なし
猫と鼠	全一冊	正價金五錢	郵税金二錢
百人一首講義	全一冊	正價金貳拾八錢	郵税金四錢
蓬萊曲	全一冊	正價金八錢	郵税金二錢

皇后陛下
明宮殿下 御覽濟の書

歲暮新歲の贈物

巖本善治妻譯

小公子

(リツトル。ロード、フホントルロイ)

再版

小供のよみ本

森田思軒居士の批評

(前略)又た若松賤子を得たり「小公子」の若きは小生竊かに推して廿年來第一の譯となす唯一と云ふに非ず第一の等列に在るべきを云ふなり「雛嫁」は驟かに之を看れば少しく「小公子」に遜るに似たり然れども之を邦語に移すに當りて「フホントロイ」と「カパフヒールド」とは其事其文兩ながら難易甚だ同じからず遽かに軒輊す可からざるなり。(早稻田文學第二拾三號)

(批評)○十一月十五日讀賣新聞○經濟雜誌五百九拾八號○巖谷季雄君○十一月十三日報知新聞○十一月十七日中央新聞○早稻田文學四號○國民の友百卅八號○十一月廿六日國民新聞○十一月十七日中正日報○亞細亞廿二號○護敎廿二號○下田歌子君○中島俊子君○石橋忍月君○一月十六日自由新聞。

定價金三拾八錢の所今回歲暮、新年の贈物として**特別金廿八錢**(郵税金八錢)に引下候間續々購求被下度候

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

裏錦

第二號目次

題言 うらにしきに題す(福羽美靜君)
祝詞 文六篇○和歌八首
社説 裏錦の經緯
論説 婦女子の基督敎的敎育續稿(北川貞行)暮年の感(德子)
敎訓 詩伯プシキンとその子守○枯枝のはなし(しら菊譯)至誠よく人を改む(纖纖女史)
女事 乳母撰擇法續稿○育兒要言、胎兒の衞生續稿(岡崎三肱)日用料理抄、茄子貯藏法、同秘法(小石生)茶の風味、製茶の事、藏茶の事(小衣子)
雜筆 トロイ戰記を讀む(郁子)古機のあと(錦子)
文藝 秋日懷姉三首(徐氏)露詩二首(トルストイ、プシキン)万葉集歷史解(さくらどの翁)小倉紙色書法(小石生)哭鳥耶特孃(洛汭五子)壬辰歲晚二首(同)五絕二首(三浦女史)和歌(七首)
小説 深山の紅葉續稿(桐廼舍かつら子)模型人體續稿(しら菊)
批評 我觀小景
雜報 數件

每月一回○定價一冊六錢六冊前金三十三錢十二冊前金六十錢市外郵税一錢

發行所 東京神田區駿河台北甲賀町十三番地 **尚絅社**

大賣捌 東京神田區表神保町三番地 **東京堂**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文部省撿定濟高等小學校教科用　藤尾錄郎君著　田口卯吉君序

實地應用 家計簿記法

此書は只朝夕數字をだに記入せば一家の出納細大漏さず之を明にするを得せしむるものにして公私の學校生徒は固より官吏、會社員、農工商に論なく凡そ一家を經營する者は必ず購讀すべきの要書なり

定價金貳拾錢
郵送料金四錢

文部省撿定濟高等小學校教科用　藤尾錄郎君著

同例題

定價金拾　錢
郵送料金貳錢

右は前書家計簿記法に據り記入法を習學せんとする者の爲に例題を設て其標準を示したるものなり

●日記帳

價金五錢　郵税貳錢

●元帳

價金五錢　郵税貳錢

●賄費仕拂帳

價金九錢　郵税四錢

但右三帳簿を一と纒めになす時は郵税六錢

右は前書家計簿記法を實用なされ候方は勿論又同法例題により簿記法を習學なされ候女學生諸君其他一般の簿記に習熟せられんとする方々の御便利の爲めに調製せしものにして此三帳簿あれば一家の經濟を容易に整理し得べく若くは容易に家計簿記法を習熟することを得べき極めて重寶なる帳簿なり

●發兌　東京京橋區彌左衞門町　經濟雜誌社

●賣捌　●東京、九善。小林。中西屋●大坂、岡島。九善。梅原。松村●京都、大黑屋●横濱、九善●其他書肆

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

歳暮新年の贈物

尋常 小學

上下二卷一冊金三十錢
爲替拂渡局駒込郵便局

上卷目次。

日本の装飾○日本人の口惜い事○猿の話○隱して知れる○あわてもの○盲人に提灯○誰になりたい○誰になりたくない○大ちやんの猫と蟹○玉とポチ○ワシントンの規則○成程判りたり○頭の上を馬車○蕈狩り○妙な勘定○獅子と黒奴○どちらも怠けもの○死なぬ法○つきぬたから○虎狩り○清正太閤を泣かす○清正太閤に詫をいふ○樵夫と山の神○猫と猿○紳士と婆さま○馬鹿氣たる話○正覺坊○かくれんぼ○兄ちやん姉ちやん○鬼のゆくゑ○はね釣瓶○歳の暮○光陰は輕んずべからず○櫻井驛○鼠の會議○日本の人口○一月の遊び○可笑しき話○花簪○お前かわるい○孔子よりもえらい○腕押○雪中の旅○亞弗利加の小兒○蛙と鼠○面白き遊び○海の無き國○こわれ玉子○犬と影○速さ加減○蝸牛よりも遲し○雀と燕○怠惰者○日本人の耳と西洋人の耳○大將と伍長○吾々の敎師○小學校及敎師○生徒の數○狼の失望○蚤と虱の競走○小供鑑○獨逸の少年○珍らき名前○惡しき生徒の寫眞○人形の幽靈○仙ちやんの夢○四角に並べてごらん○他人の越度は言はぬがよし○相撲の始まり○米だ〳〵○猫の話○蝙蝠の心變り○尾無し狐○落ち損ひ○日吉丸の頓智○春の餅○曾我兄弟の仇討いけどり曾我○臭きもの身しらず○過食せる鼠○市松と金米糖○鳩と蟻○蛙の立願○ちやん〳〵といたずら小僧○文字書

挿畫 六十六。 考物 七十。

小學生徒の作文 七十三篇。

下卷目次。

○賢き小供達へ○新井白石の幼時○小供狂言○不思議なる算術○鷄の雛と馬○曾呂利新左衞門○小供鑑○神樣を欺く○影書○學生の誠○義經弓を惜む○力松と李○とりかへツこ物語○忠僕のはなし○つんぼと談話○足と眼との交易○一筆書○川中島の合戰○親不孝○小供は正直○鷲鳥の念佛○驚べき年數○勇氣勝れたる兵卒○浮囊○西洋の遊び○獅子の話○强情同士○困ツた問ひ○猿の語○丸藥の決闘○鼠の戸籍○隱しても知れる○犬の分配○案外○舌の詮議○人間と樹木○こどもの改良○いたづらもの○忠盛變化を捕ふ○自業自得○思ひ出づるまゝ○手にて强き糸を切る法○小供狂言○へちま論○かくし文○宇治川合戰○樹の上の赤兒○にせ孝行○三ツの答問○大蛇の話○かくし文○指環の紛失○蟲合戰○蟹の相撲○答を募る○我皇太子殿下○獅子でさへも○似て居る筈○正き老人○百歳以上の人○骨の折れる御馳走○將軍の驚き○不思議なる灰○犬鳴山○聞えぬどうし○油斷大敵○犬金を蓄ふ○日本の豪傑○堪忍○小畫工○上にも上あり○小供狂言○十二日目

挿畫 八十。 考物 四十六。

小學生徒の作文 六十篇。

發行所 東京府下北豐島郡上駒込村十九番地 少年園

天田儀八君編纂

日本全國 教會便覽出版豫告

本書ハ日本全國基督諸教會。男女諸學校。新聞雜誌。諸教社。會館ノ所在名稱概則及ビ會友ノ住所姓名職業等ヲ容易ニ知ラシムル一大良書ナリ是ヲ机上ニ備ヘバ百般ノ事務上ニ便益ヲ與フルコハ確ク保證スル所ナリ出版期日ハ今月下旬代價ハ凡金廿五錢 御入用御方ハ至急 横濱地藏阪中央福音舎ヘ申込アルベシ

十二月

女學雜誌社出版書

西洋女禮 全

定價金拾貳錢 郵稅なし

目錄

第一章 婦人紹介の事
第二章 婦人書面紹介の事
第三章 婦人訪問及名刺
第四章 婦人會話の事
第五章 婦人案内の事
第六章 婦人書狀の事
第七章 婦人散歩の事
第八章 婦人裝飾の事
第九章 婦人朝夕宴會の事
第十章 卓食上の心得の事
第十一章 寄遇の心得の事
第十二章 音信及贈物の心得
第十三章 主婦客を遇する事
第十四章 婚姻に關する心得

女學雜誌社出版書

兒育草 全

定價金貳拾錢 郵稅なし

本書は育兒に關する一切の事を、極めて平易に、何人にも解し易き爲めに、問答躰になし第拾四回にて完結せり、世の母たる人是非一本を供へ玉へ。

東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

第四版 百人一首講義

鈴木弘恭大人講述 附錄小倉てびき

正價金廿八錢 郵稅四錢

本書の高評なるは人の知る所にして、和歌の手引には最とも懇切にして解し易く、クリスマス、年暮、新年の贈物には、甚だ適當なりとす。

池袋清風大人の著日本綴上下二冊

和歌の知るべ

正價金三拾錢 郵稅[redacted]

淺瀨の波

此書は有名なる池袋清風大人の著にして、案山子社中[redacted]かゝるものにして、我社出版の百人一首講義と共に歌[redacted]の御仁には頗る有益なるものなり、此道に志す御方は[redacted]本を坐右に供へ玉へ。

東京麴町區上六番町六番地 女學雜誌社

新年緊急道戯

議會吏民競爭かるた

問題提出可否多數決

右ハ弊社ガ特有ノ狂筆ナル政治家肖像ニテ其骨牌使用法モ普通ノ物トハ異リ議事問題可否ノ如何ニ因リ勝敗ヲ決シ政府更迭又ハ議員總撰擧等面白キ戯ナリ右議事日程ノ二三ヲ擧レハ○眠法笑法修正法律案○酒價特別修正法律案○贖粟金貯蓄改正法律案○權妻俸給稅改正案○借金取辨護士法案○其他ハ略ス○賣捌ハ各繪双紙店

○一組 正價十五錢○

發行所 東京神田 團々社

鈴木弘恭大人著
再版増補

文法口授 一名和文獨案内

（半紙判日本綴）

特別賣價 金拾二錢 郵便税 金二錢

目錄

（一）文と云ものゝ譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯弁に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

東京麴町區下六番町
女學雜誌社

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生編述
増補訂正第三版

皇后宮御覧

親の巻 妊婦産婦の心得 定價金三十錢（郵税二錢）
子の巻 育兒法 定價金四十錢（郵税四錢）

右は我國無双完全無比なりとの好評を博したる日本子母衛生書なり、華族女學校醫科大家産科病室並に群馬縣高等小學其他の諸學校に於て參考書として用ゐらる、文章は談話體總平假名付にして極めて理解し易し。婦人方への贈物として最上の好品なり

東京下六番町
女學雜誌社

女學雜誌社出版書

子供のはなし 全

定價金五錢
郵税金貳錢

目次

第壹回 田舍音樂師
第貳回 貧の者
第三回 熊と旅人
第四回 風と日の喧嘩
第五回 ハイ〳〵トタヾイマ
第六回 カンとクッドの話
第七回 王にも勝てる人々
第八回 母の愛
第九回 柔順なる娘
第十回 英雄の所業

一書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵劵は五厘切手一割増に限る
一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は届け賃さも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

		前金		府外
十冊		五十八錢		六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方購讀の分

		前金		府外
六冊		三十五錢		三十八錢
十三冊（半年）	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）金六錢	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金	拾錢
同	三回以上	一割引	
同	六回以上	二割引	

○十行以上一割引。 二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增さ定む。

發行所
東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三